
白銀傭兵と遠い昔の約束

崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀傭兵と遠い昔の約束

【Nコード】

N2233C

【作者名】

埼

【あらすじ】

魔法と魔物が存在している世界で、一人の傭兵が旅をしていた。彼には忘れられない過去があった。それはとてもとても辛くて。それはとてもとても悲しくて。それでも彼は逃げ出さない。立ち向かうしか償い方を知らないから。この物語は、そんな不器用な彼に再び過去が立ちふさがる、そんな喜劇にも、悲劇にも成り得る物語。

第一話 夢と悔恨と八つ当り（前書き）

初投稿になります。きっちり完結できるよう、頑張ります！少し長くなるかと思いますがお付き合い頂けるとうれしいです。

第一話 夢と悔恨と八つ当たり

全てを投げ出したって。

全てを捨て去ったって。

自分の命すらも例外なく、比較の対象にすらならないほど。

どれだけ血を流そうとも。

どれだけ血に塗れようとも。

守りたいものが僕にはあった。

それを守るためだったら僕はどこまでも強くなれる気がした。

何だっただけ出来る気がした。

それでも……。それでも僕は守れなかった。

『彼女の』を守ることが出来なかったんだ。

廻るのは白黒映画の上映フィルム。

カタカタと歪な音を立てて自らの活動の限界を伝えている。

そんな中、今日も始まるのは決まり切った世界による、決まり切った絶望へのカウントダウン。幾度となく繰り返し、延々と再上映され続けている喜劇のような悲劇。

大きめのスクリーンに映し出されているのは草原らしき場所で楽しそうに遊んでいる少年と少女。

少年はどうしようもなく臆病で優柔不断でいじめられっ子で。

少女はどうしようもなく活発で勝ち気で勇敢でそのくせひどく病弱で。

ある日少年は少女が血を吐くのを始めて見た。

彼女が苦しむ姿を始めて見た。

いつも風のように現われては少年をいじめっ子から助けだしてくれた、英雄が苦しんでいた。

少年が好いて憧れた彼女が苦しんでいた。

悩む必要ななかった。考える必要もなかった。少年の優柔不断で臆病な性格からすれば破格のスピードで決定された一つの信念。たった一人で勝手に決めた。たった一つだけの約束。

「僕は君の ……

場面が変わる。

白と黒の世界には雨が降っていた。

森の中で慟哭が木霊する。

少年は屍を抱き哭いていた。

そして少年の前には一人の人間？が立って居……

私は全身を襲うあまりの不快感に思わず目を覚ました。

……夢か。

「……………女々しいな、我ながら」

自嘲気味に言いながら額を拭くと、全身で先程の夢に拒絶反応を示していたのか額に掛かった銀髪まで汗で塗れそぼっていた。

「で……。お前等は何なんだ？」

私の記憶が確かなら、次の目的地である商業都市 ステラツイオまで歩いて向かう最中、横断していた森の中で仮眠をとっていたはずだ。もちろん周りには誰もいなかった。

しかし、今現在。私の周りには二十人近い人間が居り、私のことを少し離れて取り囲んでいた。

しかも柄の悪そうな男ばかり。

「お前は馬鹿か？この状況を見ても理解できないのか？」

一際大柄な男がえらく馬鹿にした風にこちらの質問に答える。

…まあわかつてはいたんだが。この状況やその身成りからしてどう考えても野盗だ。

しかし、目の前にいた人間をいきなり敵対視するというのは良識ある大人として如何なものであるうか。そんな反抗期の子供みたくに捻くれてもいなければ世界に絶望はしてない……でもないか。

フラッシュバック。先程の夢が断片的に蘇る。

気分が急加速的に悪くなる。

「ようやく状況を理解したようだな。随分と顔色が悪いぞ。まあせいぜい震えてな、助けなんざ来な……」

先程の男は話の途中で顔面を抑えながらもんどりうち地面に倒れる。抑えた手の間から赤い飛沫と男の小さい呻き声が漏れだす。

……ふむ。どうやら顔色まで悪くなっていたようだ。以後気を付けねばな。

あとそいつの会話を止めたのは無論私である。脇に立て掛けてお

いた剣を鞘ごとそいつの顔に叩きつけたのだ。

話が長いし、なによりこいつの顔を見てると……、なんかこうイラツとくるのだ。

あと極めて私的な理由だが、今私は最高に気分が悪い。

そこらにいる子虫程度なら気合いだけで殺せるんじゃないかと思うくらいにフラストレーションが貯まっている。

故に何処かでストレスを発散しなければならぬ。そしてこいつ等は私に敵対するらしい。

……ならば悩む必要など無いではないか。

思わず浮かぶ笑みを必死に隠しながら目の前の男たちに話し掛ける。

「私としては穏便に済ませたいところなんだかな……」

思い切り矛盾したことを言ってみる。端から聞いていたら挑発以外の何物でもない。

すると比較的近くにいた男が何やら声を上げながら手にした得物を振り上げ、私に突進を仕掛けてきた。

……… コレは中々。期待通りの反応だな。

私は無造作に右足で後ろから襲い掛かってくる男に向け上段の回し蹴りを放つ。踵が顎を捕えた感触を味わいながら懐に手を突っ込み細い棒状の物体を取り出し唾然としている前方の男に投擲する。

その棒が相手に触れた瞬間、青白いスパークと煙をあげて男を包み込んだ。煙が晴れると男は冗談のように黒こげになりそのまま前のめりに倒れた。

………。

この棒 ライトニング・レイ は、とある仕入れ屋から“非殺傷用”のワンウェイ、お試し版、と言われて渡された雷系の魔力が込められた小型”護身用”の武器である。

…どの辺りが“非殺傷用”で”護身用”なのだろうか？

というか封じられていた雷魔法が明らかに”破戒陣”級、平たく言えば低級魔法等で使う“魔法陣”級の五倍近い魔力を内包していた気がするのだが…。

…まあ、いいか。

「とりあえず全治3カ月くらいから再起不能辺りになる決意が決まった奴から、来い」

思考を放棄して、左手に懐から取り出した銃を、右手には鞘を付けたままの剣を握り、男たちを挑発する。

男たちは数瞬の躊躇いの後、数の利を思い出したのか関の声を上げ、各々の得物を振り上げ襲いかかってきた。

逃げて、追って行って打ち倒すつもりだったので向かって来てくれるのはちょうどいい。

私は迎撃するために身構えた時あることを思い出す。

まだ自己紹介をしていなかった。

私の名前はクロス・D・デューハート。

あの日、あの時、あの場所で。私はこの名前を自らに付けた。

彼女の名前の一部を、自らへの戒めとして加えた名前。

…まあ、状況が状況なのでそこら辺の話は後にしようか。

襲い掛かってくる男たちに思わず浮かぶ笑みを今度ばかりは隠さずに、迎撃、もとい殲滅を開始した。

第一話 夢と悔恨と八つ当り（後書き）

御指摘、ダメだし、感想、評価など何でも言って頂けると嬉しいです。やる気に直に結び付きます（笑）

第二話 笑顔は時に残酷で

現在、私が歩いているのは商業都市ステラツイオのド真ん中を通っている、いわゆるメインストリートにあたる場所である。

ステラツイオは面積こそ他の都市よりも劣るが温暖で滅多に荒れることの無い海に面しており、他国との貿易は専らこの港を使うのが主流だ。

どの時期でも活気があり、人の出入りも激しく、様々な人種の間が常に検問には溢れている、商業都市ステラツイオはそんな都市である。

私がこの賑やかな都市に来たのは、とある理由からだ。

私は適当に視界に映ったオープンカフェの席に腰を掛け、ウエイトレスに注文をした。

数分後ウエイトレスが注文の品 ホットコーヒーを持ってくるとほぼ同時。

「デュオさああああーん!!!!」

と、非常に不快極まりない叫び声を上げながら私の隣の席に女性が飛び込むように座った。

そのあまりの勢いに椅子は当然の如く傾き、その隣に座している私に倒れ掛かる。

私は当然倒れぬように抵抗するものの相手の悪意溢れる行為（私の足ごと椅子の足を抱えたり、それでいてきつちりと私の腹に頭突きを入れたり）の前に無駄に終わってしまう。

かくして私とその女性は絡まる様に倒れてしまったわけだが、運が悪いことに私は倒れる際、運ばれてきたホットコーヒーに肘をぶ

つけ、テーブルから落としてしまった。そして更に運が悪いことに…その“ホット”コーヒーは私の顔に降りかかってきた…。

「痛い。痛い。痛い。頭突きが決まった腹部が痛い。倒れた時に律儀に君を庇って路面に打ち付けた後頭部が痛い。“ホット”コーヒーがかかった顔面が痛い」

「あははは…：… 申し訳ないです。久しぶりに会ったら、急に抱きつきたくなっちゃって」

あれだ。この子は私のことを熊の人形とかと勘違いしているのだろうか？

というか、前に一緒に旅をしていた時そんなことを頻繁にされた覚えも無いし、させた覚えもない　はずだ。

「けど、あの時は…：…」

アレクの言葉をそこまで聞いた時、私の中の記憶のピースが音を立ててはまる。

「…：…いよおおおし！　アレク君！！　わざわざ私を呼び出した程、私に伝えたい情報を聞こうではないか！」

運ばれてきたアイスティーを掻き混ぜ顔を赤らめながら話す、彼女　情報屋であるA・ストレインの話を見栄も外聞もなく全力で止める。

我ながら激しくみっともないが背に腹はかえられない。

私のそんな様子を見てアレクは若干、笑いを堪えるような素振り

を見せたが素直にその話題を切り上げた。

アレか？今、私は弱みを握られたのだろうか……？
何やら激しく遣る瀬ない思いにかられながら、とりあえず再度彼女に話を促す。

「……で？ その情報とは何なのだ？ 風魔まで使ったんだ、よほどの情報なのだろう？」
「え〜と、ですね…。有った有った、コレですよ、コレ！」

ひどく嬉しそうに私に情報整理用の手帳を見せてくる。

……情報が命と同等の価値を持つ筈の情報屋が、そんな簡単に情報を見せびらかして良いのだろうか？

「デュオさんだからですよ。誰にでもこんなことするわけではないんですよ！」

……や、そんな大きな声で勘違いされる様なことを言わないでほしい。一応、私とて人目は気になるのだ。
で、その内容とは…。

…我知らず、顔が引きつる。

その手帳には見開きの二ページまで『クロス・D・ハート暗殺計画！主催リオゼール王国』と、でかでかと書かれていた。

私は視線を横にずらしてアレクの顔を見る。

満面の笑顔だった。

第二話 笑顔は時に残酷で（後書き）

読んで頂きありがとうございます。いや、短いすねえ。本当は次の章と纏めるつもりでしたが、思いの外切りが良くなってしまうための投稿です。評価、感想、ダメ出し、何でも書いて頂けると、とても嬉しいです。

第三話 対価はあまりに高すぎて

固まった思考を無理矢理に解凍し、改めて現在の状況を整理していく。

確かにあの国とは少しばかり問題を起こしたが、が、暗殺を企てる程、恨まれる理由が無い。

そう。第一太子がちょっとムカついたので、精一杯に手加減をしてぶっ飛ばした、それだけだ。

今だに満面の笑みを浮かべているアレクに詳しい内容を聞く。

「で、その暗……」

「これ以上はいくらデュオさんでも言えませんよ」

未だに笑顔である。

……。

なるほど、な。

ようやく彼女が笑顔を浮かべている理由がわかった。

「雇え、と？」

「さすがデュオさん！ わかってますねえ」

メリット、デメリットを比較し熟考を……、する必要もないか。

「わかった、頼もう」

懐から革の袋を取り出して彼女の前に置く。

それを見て、アレクはキョトンとした顔をしている。

ん？足りないだろうか？

まあ彼女は性格やその他諸々の問題に目をつむれば、非常に優秀な情報屋で、尚且つ魔法もかなり扱えるのだ。確かにこれだけでは雇うことは出来ないかもしれない。

かといって手元には森の中で出会った、例の野盗達から拝借したこの金貨銀貨しかない。

……………どうしたものか。

「そんなものいりませんよ。嫌だなあデュオさん」

彼女をどうやって丸め込むかと思考しているときに、けらけらと笑いながらアレクが声を掛けてきた。

……………それが雇え、と言った人間の言うことだろうか？

「お金なんていりませんよ。ただちよつとした条件を呑んでほしいんです」

…なるほど。交換条件か。

彼女ほどの情報屋が出す条件だ、難解な可能性も多いにあるが背に腹は変えられまい。

私は新たに頼んだレモンティー（アイスである）を一口飲み決心をきめる。

「わかった。どんな条件だ？」

「結婚してくださいッ！！」

賑やかであったオーブンカフェが瞬間的に凍結した。

私は口に残っていたレモンティーを誤嚥^{ごえん}し、むせる。

……いや、そんな赤い顔しながら言われると、どういう反応をすれば良いのかわからない。

というか、彼女の姿やその他の詳細^{スベック}を特に説明していなかったから、この状況がいかにマズイのか分からないと思う。

彼女、ことA・ストレインは長いブロンドの髪を後ろでまとめ、大きい翡翠色の瞳、それとは対照的に小さい顔とそのパーツ、そしてその肌は抜けるように白い。

そのどれもが全く違和感無く調和しており、「美しい」と評しても一切合切、誰も文句を言わないであろう………十四歳だ。

あ、あと身長は低い、かなり、とだけ言っておこう。

この状況がいかにマズイか何となく察してもらったところで思考に戻ろう。

というか先程の彼女の発言のせいで周りからは何か薄ら寒い視線を感じる。

それと同時に様々な場所からヒソヒソと声が聞こえてくる。内容は聞きたくないので意図的に無視する。

どうやってこの場から逃れるか、脳内で様々なシミュレーションを行う。そしてそのどれもが彼女の圧倒的な口撃により打ち砕かれる結果となることは火を見るより明らかだった。

彼女は高らかに結婚宣言した後、じつ、と私を見つめている。
周りからの視線と小声という不可視の暴力は更に高まる。

……………何時までも黙っているわけにはいかない。何か言葉を発し、
打開策を模索しようとした、

瞬間。

地を揺らす程の爆音が連続して辺りになり響く。

私は反射的に彼女を抱き抱えテーブルを盾の代わりに倒し、そこ
に身を隠す。

爆風は……………、来ない。

すぐさま身を翻し、背中中の鞘から剣を抜き放ち、構える。メイン
ストリート沿いのフードショップが爆発、炎上している。それ以外
の店も数店、否、十数店がメインストリート、横道、問わずに炎上
している。

大勢の人間が逃げ惑い、辺りは騒然となっている。この騒ぎを起
こした者の姿は見えないが、魔磁場の揺らぎを感じる。

魔物か？魔法使いか？

私は横でテーブルから顔だけ覗かせているアレクに問いかける。

「これは明らかに計画的な襲撃だ。そういった情報は無かったのか
？」

「え〜とですね、非常に言いづらいのですが、デュオさんの命を取
りに来たのではないかと…。」

苦笑いを浮かべるアレク。

頬が引きつっている私。

しばらく、お互い見つめ合いながら固まっていた。

第三話 対価はあまりに高すぎて（後書き）

次回にてとうとうまともな戦闘です。

少し楽しみながら書けるかな、と（笑）

追記ですが、次回からもう少し長くなるかもしれません。そちらのほうを楽しめますしね。作者が（え

感想やら駄目出し、頂けると力になります！

第四話 彼の慚愧と彼女の策謀

「またも氷結してしまった思考を再度解凍し、言葉を選びながらアレクに問う。」

「何故直接私を狙わないんだ？」

「デュオさんとまともに戦って勝てると思ってないんですよ」

「……なるほど、混乱に乗じて攻めてくるつもりか。まどろっこしいな」

私は苦い顔をしながら辺りを見回す。

人波が途切れ途切れになっているところから先程よりも人の数が減っているのがわかる。

大方、治安部隊か何かが避難誘導でもしているのだろう。

しかし、人の数が減っていくのと反比例して、悲鳴が大きくなっていく。

何故だ？ 何があった？

人の数が減り始めると先程気が付かなかった物が目に入る。なるほど。だから、か。

前方、少し離れた場所に、上半身、特に内蔵の辺りを大きく食い破られ、周辺に血潮をばらまいている

死体が打ち捨ててあった。

そして、その者の体を貪り喰らっているモノの姿も同時に視界に

映る。

人間の大人ほどありそうな巨大な体躯に、三つ目、三ツ又にわかれた長い尻尾。口の端からは朱色に濡れ光っている牙が覗いていた。その魔獣の名をケルベロスという。

一部の最上位級の魔物のみが扱える秘術により、無から産み出された有なるもの。

創造主には非常に忠実、狼のような姿に変わらず、群れで対象に襲いかかる。

私はこの魔獣を造り出す秘術を使う魔物を過去に一度だけ見ていた。

あの事件の発端にして、一つの町を簡単に根こそぎにした魔物。

しかし、その魔物はその場にいた、後に私の師となる女性に殺された筈だ。

一瞬、過去のフィルムが廻りだす。

どしゃ降りの雨の中。天使のような純白の翼を持ち、それと同色の服で全身を統一した男が少し離れた場所ですら腰を掛け、遠くから聞こえる人々の絶叫、断末魔を聞きながら、哄笑し、俯いたまま動かない少年に話しかける。

「君はね。結局のところ誰も守れないんだよ」

どしゃ降りの雨の中、人々の絶叫の中、その柔らかな声は不思議と明瞭に少年に届く。

「守るためにと。失わぬためにと。強くなろうとしたのにな」

男は立ち上がり、滴る水も気にせず、少年に歩み寄る。

「そう、君は」

男は少年の前まで歩くと、どこから取り出したか、左手に長剣を持ち、少年に突きつけた。

少年は俯いたまま動かない。

「……………」

「……………」

その声で私は意識を現実に戻される。

……………いい加減みつともないな。過去ばかり振り返るのは。わかつてはいるんだが……………。

とりあえず反省も後悔も慙愧も後回しだ。

振り返る余裕も時間もない。

頭の中で現在の状況を再度確認し、とるべき行動を選択する。

相手のバックにはロキ級の魔物が居る。ケルベロスがいる時点で恐らくそれは間違いない。

本来、魔物が人間に取り入るということはあり得ない。だがそれは下位級フイアや中位級シレンまでの話であり、ロキ級は違う。

彼らは自らの目的の為ならば人間に協力することも厭わないであ

ろう。

まあなんにせよ現状では情報が足りないな。

「アレク。何か情報はないか？」

「今回の件はリオゼール王国の太子、単独での行動で王国自体は絡んでいないようです。彼が戦力不足で踏みきれないでいるところにロキ級の魔物が介入したようですねえ」

なるほど、な。やはり一枚噛んでいたか。

ならばとるべき行動は決まっている。

「私は動き回ってできるだけ多く奴らを始末する。お前は出来るだけ多くの人を避難させてくれ」

「え〜。…んん〜、まあ婚約者の言うことを聞くのもやぶさかでは無いんですがねえ」

間。

……………なっ!??

「な、何を言っている!? 私は」

「けど情報は渡しましたしね」

「……………っ! 妙に素直に情報を提供したと思ったら…」

「んん〜、約束は約束ですー」

……………くっ、言い逃れできない。

「あっ、デュオさんが大きな声出すから、あの子がこっちに気がつ

「いちゃいましたよ。あゝ、走ってきますねえ」

アレクが凄まじく緊張感の無い声で緊急事態を告げる。
「というか魔獣を指して、あの子とは…」

「…まあ、いいか。」

とりあえず、やるせない鬱憤をぶつける対象がこちらから来てくれたのだ。出迎えねば。

思い出したこと一つ付け足し再度アレクに指示する。

「この街に黒髪の子が来てるはずだ。もし見つけたら、共に行動しろ。私の名前を出せば協力してくれるはずだ」

「へえ…双子さんですか。どんな関係なんですか？」

何か色々と勘違いしているのだろう。若干顔に青筋を立てて詰問してくる。

伸びてきたアレクの腕を掻い潜り、私は一言「弟子だ」と残しケルベロスに向かって疾走を開始する。

剣はすでに抜き放っている。瞬く間に詰まる距離。

「一体きりでしかも直線的に突進してくるだけか？」

ケルベロスが飛びかかってくるのを視認し、立ち止まらずにその左側を駆け抜ける。

ケルベロスが地面に着地し、再び私に狙いをつけるため反転した瞬間、その体が三つに分かれ、瓦解する。

「ぬるいな」

集団で狩りをする魔物が単体で攻撃を仕掛けてくる時点で問題外だ。

私は走りながら周りを見渡し、爆煙を上げている場所を目指し疾走する。

早々に奴等を倒さなければ被害は拡大するばかりだろう。それに原因が私ならば私が解決するのが筋であろう。

あのバカ皇子にも一撃、キツいのを入れねば…そうだな、半殺しでは生ぬるい。十分の九殺しくらいは…

そんな決意やら何やらを心の中で固めていると後ろから声を掛けられる。

「デュオさあぁん！」

「……なんだ？」

これ以上アレクの機嫌を損ねるのはマズイため、私は足を止め、後ろを振り返り、渋々返事をする。

実際はこの場から走り去りたい気持ちで一杯であったのは言うまでもない。

視線の先では、ひどく機嫌が良さそうなアレクが手を振っていた。

何故上機嫌なのかは分からないが、機嫌が良くなるのは一向に構わない。しかし、毎回毎回大声で名前を呼ぶのは勘弁してもらえないだろうか。人がほとんどいないとはいえ恥ずかしい。

「帰ってきたら、ご飯にする？ お風呂にする？ それ

…」

みなまで聞かず、私は遁走を決め込んだ。

第四話 彼の慚愧と彼女の策謀（後書き）

お読みいただきありがとうございますm)——(m 一気に仕上げ
たため間違い多数かと思いますが、そういった場合やさしくご指摘
をいただけると………(笑) 感想、評価をいただけると嬉しい
です。 ではこれにて。

第五話 白銀は紅き絨毯の上で思考に耽る

正面から叩きつけるように突き出された爪を左に避け、左から飛び込むようにして頸動脈を狙ってきた牙をしゃがんで交わし、かなり無理な体勢をとりながらもそれらをまとめて叩き切る。

首を切られた方は無論即死。腕を切られた方は怯んでたたらを踏んだ所を見逃さず、蹴飛ばして転んだ所に剣を突き刺す。絶命したのを確認し、引き抜いた剣を後ろも見ずにすぐさま背後へと叩きつける。小さい断末魔を残し顎から上が無くなったケルベロスを確認し、爪によって切られた衣服を確認しながら改めて辺りを見回す。

辺りにはケルベロスの死体が累々と転がり、一帯には血や臓物で彩られた深紅の絨毯が広がっている。それでも未だに数体が距離をとって私を取り囲んでいる。

……面倒なことになったな。

アレクと別れて数十分。襲撃 否、どちらかというところ待ち伏せ』はすでに5度目となる。

しかも襲撃の度に学習しているようで、最初の頃と比べると私を囲むように戦闘を展開したり、団体の利を生かし波状攻撃を仕掛けてきたりと段々と厄介になってきている。

「…まあそれでもたいしたことはない、か。こちらとしては敵が集まってきたくれるので楽といえば楽である…っが！」

私のぼやきの途中で左右からから飛び出してきた二体に剣と鞘を同時に打ちつける。

両手とも狙い違わずケルベロスの首筋へと吸い込まれ、剣を持つ右手側ではその首を切り飛ばし、鞘を持つ左手側では頸椎を激しく打ち据えて破壊する。

……それにしても妙だ。

どうして、こつも私の行こうとしている場所に敵が待ち伏せているのだろうか？

敵が匂いでの追跡を得意としているとはいえ、これほど完璧に私の居所を掴めるのはおかしいのだ。

…ならば何故だ？

考えられる可能性は一つ。

何者かが私を索敵し、それをケルベロスたちに伝えていた、ということだ。

その何者か、は恐らくケルベロスを生み出した者……つまりはロキ級だ。

もし本当にそうだとしたら非常に……不味い。

そもそもロキ級の”ロキ”とは大昔に一度世界を破滅させかけた魔物の名前からつけられている。

そして、その名を冠するだけにロキ級に属される魔物の強さは半端なものではない。

人前に出ることはほとんどないのだが、一度その重い腰を動かすと国一つがまともに抵抗すら出来ずに一夜にして消滅する。

それほどの怪物バケモノなのだ。

それがこの街に居る。

我知らずに冷汗が頬を伝う。この都市には相当の人間ステラツィオが居る。

もし戦闘になった場合、どれだけの犠牲が出ることになるか想像すら出来ない。

さて、どうする？

……。

……。

…考えるのは後だ。今は眼前の敵に集中するでしょう。

私が思考に耽りながら片手間に戦っていたケルベロスも残り二体となっていた。

二体とも距離を取ったままこちらを睨みつけ　その足下に赤い色をした魔法陣を展開していた。

ケルベロスが得意としている炎刹系えんさつの魔法”火球”を放とうとしているのだ。

出来るだけ接近戦に持ち込み、集束陣の展開を阻止していたのだが……。

他の事ばかり考えているからだな。気をつけねばな。

ケルベロスが一声吠えると集束した炎を私に向かって吐き出す。

私は一つ溜息を吐き、剣を鞘に納め、着ていたコートから通常の拳銃よりも一回り大きく、グリップの部分に半透明な宝石が付いた銃を取り出し、火球にポイント、間髪入れずに連続して発砲した。

撃ち出されるのは鉄の弾丸ではなく、凝縮された炎の弾丸。

この銃　名をヒドウンという　は例の似非護身武器　ライトニング・レイを私に渡した件くだんの仕入れ屋から渡された銃であり、グリップの部分に付いた宝石から体内の魔力を少量吸収し、凝縮、通常の

弾の代わりに打ち出す銃 まあ平たく言えば武器型の集束器だ。

この集束器があれば魔法を扱えない者や、実戦で使えない程魔法が下手糞な者等でも比較的容易に魔法が使えたり、武器自体に特殊効果を付加したり出来る、というわけだ。

私の場合は少し違った理由でコレを使っているのだが、それはまた別の話だ。

そもそも魔法とは……と、また余計な事を……。この話もまた後でしよう。

放たれた弾丸が火球を難なく貫き、内から掻き乱して一瞬の内に霧散させる。

炎の弾丸は火球を相殺させるだけに留まらず、貫通してケルベロスに襲い掛かる。

炎の弾丸がケルベロスに触れた瞬間、投網を広げるように弾けてケルベロスを包み込む。

全身を炎に包まれたケルベロスは全身を焼く痛みのためか、はたまた炎を消そうとしたのかゴロゴロと路面を転がるが、すぐに路面を舐める様に沈黙する。

さてと……、一掃はしたか。

私はため息を吐きながらとりあえず片手に持ったままであった剣を背中に固定すると視線を周辺に向ける。

……なんというか、まあ暴れに暴れたな、我ながら。

肉が焼き焦げる匂いを感じながら再び走り出そうと瞬間、視界にメインストリートをこちら側に走ってくる三つの人影が入る。

次第に影が大きくなるにつれ何やら声が聞こえてくる。

「デュオさあああん!!!」

「しいいしよおおー!!」

三つの影のうちの二つから叫び声に似た歓声が聴こえてくる。

…私の周りにはこんな人間ばかりなのだろうか？

少しだけ涙がこみ上げてきた。

第五話 白銀は紅き絨毯の上で思考に耽る（後書き）

5話目にしてようやく戦闘シーンがかけてました（少しだけですが）。

次回、弟子・中ボス1・中ボス2が登場です。

戦闘色もつと濃くなります。…筈です（爆）。

ではこれにて。感想、評価を頂けると嬉しいです。

第六話　ゼブラな双子とお馬鹿さん

(叫び) 声を上げながら三つの影が近づいてくるにつれ、その姿が鮮明となってくる。

そのうちの二つの影は同じ服装をしている。

いわゆる着物、というもので極東にある小さな島国では日常生活でも着られている代物であるが通常のソレとは違い、裾や袖等の邪魔になる部分は糸で縫い付けてあるようだ。無論この大陸ではそういった服装が一般化していないのだから一際異彩を放っていたであろうことは想像に難くない。

しかし、何よりも異彩なのはその着物の色だ。

一人はいわゆる純白。

一人はいわゆる漆黑。

裾やら袖やらが短くなってもはためいて走りずらそうな服を気にもせずこちらに走って来ている。

………何とか、一段と趣味悪くなったな。

まあ襟がコーヒー色をしているワイシャツを着ている私が言うのも何なのだが…。

残りの一つの影は言うまでもない。…というかあまり考えたくない。

自然、視線が他所よそに泳ぐことを誰が咎めることが出来よう？

「デユオさあああああん！」
…。

「デュオさあああああん!!」

…。

「デュオさあああああん!!」

…。

段々と近づいてくる声を無視し続けるのは流石に無理と察し、視線を戻すともはや数メートルという所にまで彼らは近づいていたようでもはや細かい表情すら見て取れる。

二人喜色満面。一人無表情。

「ううう…師匠、久しぶりです。久しぶりすぎて涙が…」

「…師、久しぶり」

「ああ、久しぶりだな。あ、あとハクヤ、五月蠅い。コクエ、ちゃんと飯を食え」

白黒双子

短髪で年の割にはがっしりとして、笑顔がやたら

似合いそうな印象を受ける白い方、ハクヤH・シンドー。肩口まで伸びた

髪、中性的な顔立ちとそれに見合った様に華奢な身体つきをしてい

る黒い方、コクエK・シンドーは共に性格を如実に現わす挨拶をしてくる。

相変わらず双子とは思えない対称っぷりである。

性格も昔のままだな。

「師匠、相変わらずの毒舌っぷりです!もっと、もっと責め…」

「…死ねばいいのに」

「えっ!? コクエ酷くね!」

…否、ボケには更に馬鹿さが増して、ツッコミには冷徹さが加わっていた。

頼もしいな…。ツッコミの方。

「デュオさんも言ってくれば良いのに、男の子の双子さんだなんて。勘違いしちゃいましたよ」

「ん…？」

いつの間にか近づいて来ていたアレクがやたらと上機嫌に話しかけてくる。私は適当に相槌を打とうとしてその言葉に引っ掛かる。

…男の子の双子さん？

アレク……………、君はまさか。

「特にコクエさんの方なんて綺麗な顔してるから女の子かと思っちゃいましたよ」

俯きながら自分の手で頭を小突くアレク。えらく可愛く見えるその仕草だがそれを観察している余裕は今の私には……………無い。

アレクが俯いているおかげで気づかれていないが、今私は視線を逸らして思いきり頬を引き攣らせている。

ちなみに、逸らした視線の先ではコクエが顔を赤くしながら俯き、ハクヤが斜め下を見ながらフルフルと握った拳を震わしていた。

そういえばコクエは真正面から褒められると弱いんだっただな…。

「お化粧映えしそうな肌なんですよね。それに髪もほんとに黒くてツヤもあって綺麗ですし」

今度は腕を組みながら目を閉じて一人頷きながら語っている。
今度は目を瞑っているから気づかれていないのだが、私はすでに
腹筋を痙攣させ、いい加減限界を迎えようとしていた。
視線の先には顔を更に赤らめ、たぶんこのまま放っておいたら卒
倒するのではないかと思われるコクエと、完全に後ろを向き肩を小
刻みに震わせているハクヤが居た。

今更だが彼女は大きな勘違いをしている。
そして彼女のことだ。その理由は容易に想像できる。

「……………して、それ程女の子要素を持つコクエを何で男の子だと思
ったのだ？」

めくるめく笑いの予感に後押しされ私は言葉を吐き出す。

「そんなの決まってるじゃないですか！」

アレクは両手を腰に当て胸を張る。

「女のカンですっ！！」

爆笑が辺りを蹂躪した。

第六話　ゼブラな双子とお馬鹿さん（後書き）

えー、誠に申し訳ありません。次こそは中ボスが登場するかと…。

次話はわりと早めに投稿できる筈かと。では、失礼しますm（――）

m

第七話 弟子は二人で舞い踊る

それから十五分のインターバルを取り、私たちは混沌と化した状況からようやく立ち直っていた。

ちなみに内訳は私とハクヤの笑いが収まるのに五分、コクエの赤ら顔が元に戻るまで五分、イジケテ地面に『の』の字を書き続けるアレクを宥めたり賺^{すか}したりして機嫌を取るのに更に五分という所だ。ちなみにアレクの機嫌取りには予想通りかなり苦勞を強いられたが、「一ヶ月間私を自由にしてよい」という条件を餌にした瞬間、すぐさま食いついてきた。

…目が血走っていた気がするがこちらが出した条件だけに今更取り下げるわけにもいかず、この件が終結したらすぐさま捕縛されることが決定した。

そしてこの白黒双子だが今更説明するまでもないが兄弟ではなく兄妹である。

昔、あるごたごたに巻き込まれた際にしばらく面倒を見ることとなり『師匠』と呼ばれるに至ったわけだ。

…しかし。

「何故私に会いたいなどと？お前たち、かなり遠い所に居たんだろ？」

私の質問に二人は顔を伏せる。

その顔には先程までの笑顔は…無い。

噛み切れんばかりに下唇を噛み、何かを逡巡している様子であったがやがて意を決したように顔を上げる。

「……もう一度俺達に修行をつけてくれませんか？」
「……お願いしたい」

真剣な顔で二人は私に詰め寄る。
私は目を細めて二人を見やる。

「……俺達が護衛屋をやっているのは確か前に話しましたよね？
それで俺達……俺達初めて命を賭けても護りたいと思える人が出来
たんです」

「……でも、護れなかった」

間を置き話し出した二人の顔にはありありと慙愧ざんきの念が浮かんで
いた。

「悔しくて……。何も出来なかったのが何よりも悔しくて……」
「……過信してた。自分たちの力を」

その感情には私も覚えがある。

自分の掌から砂の様に零れ落ちる大切な者の命。
自分の非力を悔やんで、呪って、絶望して。
こんな不条理を許す世界を恨んで、呪って、絶望して。

気が付けば、心は黒く染まりきっていた。

彼女がくれたたった一つの光すらもいとも容易く塗り潰されるほ
ど。

「もうこんなのは嫌なんです！ 自分のせいで……、自分が無力なせいで何もかも失うのは！」

「…せつかく手に入れた光を二度と失いたくないから」

正直驚いていた。

「だから！」

「…だから！」

あの日。

あの時。

あの場所で。

『力を…大切な人を護れる力をください！』

私が師匠に言った言葉と同じだったから。

少し誇らしく、少しこそばゆく感じながらも、目を逸らす事無く二人の漆黒の瞳を見返し、私はあの“言葉”を口にする。

「大切なものを護るのはいつも命懸けだ。覚悟はあるか？」

その“言葉”はあの時、私が師匠に言われたもの。

『あります！』

思わず顔から笑みが零れる。

そして気が付けば、私が師匠にしてもらったように、二人の頭をくしゃくしゃと撫でていた。

それをきっかけに二人は私に抱きつき、嗚咽を上げて泣き始めた。

少しの間の後、私は二人の頭を撫でる手を止め、後ろに振り向く。

「さて、話はここまでだな」

「……あゝ来ちゃいましたねえ」

「まあ元々こちらから動くつもりはなかったからな」

相手側に索敵が出来る魔物が居ると分かった時点で動き回る理由が無くなった。狙いは私と決まっているようだしな。

メインストリートの魔物も大半は駆逐した訳だし、まあこれ以上大きな被害は出ない、とも踏んでいた。

さすがにそうでなければこんな所で談笑しているわけにもいくまい。

「えっ、何が来たんですか？」

「……敵？」

泣き止んだ二人が私とアレクが見ている方向を見て少し掠れた声で疑問を投げかけてくる。

「……ふむ。魔力の動きが読めないか。」

やはりこの二人はもう少し魔力系統の修練が必要なようだな。

「まあ、言わば今回の襲撃のまとめ役だ。……シレン級か？」

「……そのようですねえ。てっきりロキ級が直接来ていると思ったんですけど……」

私もだ。しかし、どこかに潜んでいる可能性も無きにも非ず。
……油断は出来ない、か。

「とりあえず、お前たちを私の護衛として雇う」
「……え？」

私の急な提案に二人は呆気にとられている。

「今私も命を狙われているからな。それになによりお前たちに必要なのは実戦だ。……で」

私はニヤリと笑いながら続ける。

「今から此処に来る魔物の相手をしろ」

「えーと、ただのシレン級ですよね……？ なら問題ありません！」
「……問題無い」

常の威勢を取り戻した二人は余裕といった感じで返答してくる。
まあ、この二人ならシレン級如きに遅れは取らないだろう。…普通の、ならな。

ちなみに先程まで戦闘していた『ケルベロス』はファイア級である。簡易的に戦闘能力を比べればシレン級はファイア級の五倍近い戦闘能力を有する、と言われている。

そう考えるならば今から此処に来るシレン級も敵では無い様に思える。が、実際そう甘いものではない。

私とアレクが数メートルほど下がり、ハクヤとコクエが数メートル前に出て腰に下げていた鞘から抜き放った得物を構える。

この二人の得物は『太刀』と呼ばれるものでこの二人の出身地で

多用されている刀剣だ。

しかし二人の太刀には通常のソレとは圧倒的に異なる部分がある。

青白く光っている柄の部分には『トリガー』があり、刃の逆側には細長い噴射口の様な穴が開いている。その噴出口のせいかな通常の太刀と違い少し肉厚なようだ。

…聞きたくはないが聞かねばなるまい。

私はコメカミを押さえながら二人に声を掛ける。

「…………それは誰から貰った？」

「伊達眼鏡でいつも白衣で、エメラルドグリーンの髪の人ですけど」

「…師の弟子だ、と言っただらうけれど」

予感的中。

「あの人ですねぇ……」

「あいつだな……………」

横で苦笑しているアレクに頬を引き攣らせながら答える。

あの、お節介め……。

「どつし……」

私たちの徒ただならぬ様子を見て何事かと二人が聞き返してきた瞬間、突如として轟音が響き渡る。

『なっ！？』

思わず声を上げた二人が瞬間的に身構える。

音源は私たちの視線の先、およそ二十メートル程離れた場所だ。

土煙が上がり何が居るのかは視認出来そうにない。

どうやらメインストリート沿いの建物の屋上から飛び降りてきたようだが。

「思ったより大きいな」

「正面から来るんですね。不意打ち嫌いなんでしょうかね？」

「そこまで頭が回らないだけだろう」

「二人とも落ち着きすぎじゃないっすか！？　ってかあの状態で大きさとか判るんですかっ！？」

私とアレクの他人事のような話しているのを聞き、思わずハクヤがこちらに振り返ってツツコミを入れる。

お前、ツツコミも出来たのか…。

そんな場違いな感慨に浸りながら私はニヤリと笑って答える。

「私たちは戦わないからな。それに敵の大きさが判らないのはお前の修練が足りないからだ」

「ですねえ」

私とアレクがニヤニヤと笑いながら話しているのを聞いたハクヤが反論しようと試みるが凶星であるため反論出来ないのか、何やらしかめっ面をしてこちらを睨んでる。

…実際の所、その様を見て私は安堵していた。

先程の話、引きずっていないと良いがと思っていたのだが、どう

やら要らぬ心配だったようだ。

……強くなったんだな。

先程とは違う笑みが自然と顔に表れていた。
中々心地よいものだな。こういう気持ちも。

「…来る」

「でっかあああ!!」

コクエの声で再び前を向いたハクヤが驚嘆の声を上げる。

土煙を抜け、姿を現したのは二メートル近い人型の胴体に牛の顔が乗っている魔物、ミノタウルスだ。その胴を頑強そうな赤い鎧で覆っている為、唯でさえ見上げるほどの巨躯であるのに、更に巨大化したような錯覚を覚える。

「ガアアアアアツツ!!!」

姿を現したミノタウルスが両手の戦斧を振り回しながら雄叫びを上げる。

その余りの迫力に完全に気圧されているハクヤ、コクエを無視し、濁った声で私に話しかけてくる。

「貴様ア、ナゼ動力ナカッタ」

「お前らもこちらの場所が分かっていたのだろう？ ならば余計な体力を使う必要はあるまい。雑魚も粗方殲滅したしな」

私が挑発するように鼻を鳴らして嗤うと、ミノタウルスは鼻息を荒くしながら口元を歪める。

「クエ又男ダ。アノ方カラ、聞イタトオリダ」

「あの方？ ロキ級か？ そいつは此処に居る？」

「答エルスジアイハナイ。死ネ」

話はそれで終わりだと言わんばかりに更に鼻息を吐き出し、両脚に力を込められる。

そして私に向けて飛び出そうとした瞬間、その両の二の足から血が噴き出す。

「…ッ？」

「お前の相手は俺達だ」

「…舐めてると首、落とすよ」

言うまでもないがミノタウロスの両足を切り裂いたのはハクヤとコクエだ。

私がミノタウロスを挑発している間に一足飛びに間合いを詰めて脚を切り裂いたのだ。

ミノタウロスは未だ血が止まらぬ両足に力を込めて強引に出血を止めると両手に持っている斧を左右に居るハクヤとコクエに向けて横合いから打ち付けた。

それを太刀の腹で辛うじて受け止めたハクヤとコクエだが勢い余って私達の所まで吹き飛ばされてくる。

それを受け止めた私とアレクだが、私が受け止めたハクヤが思いつきり頬を引き攣らせて私に捲くし立ててくる。

「ちよっ！ アレの何所がシレン級なんですか？」

「何を言う。あれはまごうことなきシレン級の魔物だぞ」

もともと魔物はクラス分けされているとはいえ、ピンキリなのだ。何千年も生きているようなロキ級の魔物も居れば、数百年しか生

きていないような口キ級も居る、といった感じだ。

そして、今、視線の先でこちらを見据えているミノタウロスはシレン級の中でも間違いないく上位に位置するシレン級だ。

「まあ相手は魔力を身体能力上昇に費やしているようだから、魔法は使えないだろう。楽勝じゃないか？ 安心して私を護衛してくれ」
「いやいやっ！ そういう問題じゃないし！ ってかどんだけ尊大！？」

昔から師匠とか依頼人というものは尊大だと相場は決まっているものだ。

敬語を使うことすら忘れて、ボケをやっているとは思えないようなキレのあるツッコミを披露してくれている弟子の姿は非常に好ましいのだが状況が状況だけに今は心を鬼にするしかあるまい。

「では、アレク」

「はい！ じゃあ、せーの…」

弾けんばかりの笑顔を浮かべているアレクと共に受け止めていた弟子たちを…前へ蹴り飛ばす。

「え？」

「…鬼」

ほらほら、呆けてたり、悪態をついてたりする暇なぞ無いぞ。

ミノタウロスが再び咆哮する。空気が震動して辺りの窓ガラスが震え、ヒビが入っていた物は尽く割れていく。

「ちっ！ 腹決めて行くぞ！」

「…当然」

悪態をつきながら飛び出す様に間合いを詰めていき、左からはハクヤ、右からはコクエが切り込んでいく。

その姿を見ながら隣に来たアレクに声を掛ける。

「いざとなつたら…あいつらに『盾』頼むぞ」

「わかつてますよ」

私の要望に人差し指で虚空に複雑な集束陣を展開しては消して、展開しては消して、と繰り返しながらアレクは二つ返事で応える。

「すまないな。あれでも大事な弟子なんだ」

素直に礼を述べ、素直に思っていることを口にした。らしくないかもしれないがこれが本音だ。

そんな少し湿っぽい心情を察してか、アレクは悪戯っぽく笑いながらこちらを見上げ口を開く。

「夫の頼みを快く聞き入れるのも良い妻になるためには必要なことですからねえ」

私の顔が思いきりしかめっ面になったのは言うまでもない。

すでに数度の接触を繰り返しているハクヤとコクエは数の利を生かして波状攻撃を繰り返していた。

ハクヤが大上段から大振りに太刀を振り切り右の斧を勢いに任せで弾き、肩口を切り裂く。

ミノタウロスがハクヤの攻撃の隙を突こうと空いた左の斧で薙ぎ

払おうとした瞬間を狙いコクエが胴を切り裂き、返す刀で二の腕を切り裂く。

一見、二人が圧倒しているようにも見える。

「んんん、あのままだとマズインじゃないですかあ？」

隣にいるアレクが難しそうな顔をして呟く。

確かに手数と素早さで攪乱かくらんして誤魔化してはいるが、どの傷もシレン級に致命傷を与えるには程遠く、いずれ押し切られるのは目に見えていた。

あいつらにはまだ幾つか隠し玉が有るはずだが、それを出さないのは自分たちに制約を設けているのか、相手を舐めてかかっているのか…。

どちらにせよあの二人の実力では力を隠してどうにかなる相手では無いんだがな…。

その懸念が現実のものとなる。

「あああああああッッッ！！！」

ハクヤが貯め込んだ息を吐き出しながら、左から叩き付けるようにミノタウロスの右腕を狙う。

しかし、腕のあまりの太さに半ばまで切り裂いたところでその刃が止まる。

「こなっ…クソオ！」

筋肉を締められ、動かすにも動かせない太刀のトリガーに指を掛けようとした瞬間、武器を手放し、予想以上にスピードが乗った左の拳がハクヤの胴体を捉える。

「がつ！」

鈍い音と苦鳴を残し、ストリート沿いのブティックにガラスを割りながら吹き飛ばされていく。

吹き飛ばされた際に剣を手放さなかったのは大したものだが、一瞬でも動きを止めたのはマズイな。唯でさえ相手よりも上回っているのがスピードと手数だけなのだからな。

「ハクヤ！」

ハクヤの吹き飛ばされた方に気を取られ、コクエはミノタウロスの振り返り様の掬い上げるような一撃に反応が遅れる。

「くつ」

その攻撃を避けることが出来ないと悟ったのか、太刀を軌道上に構え防ごうとするが、先程防いだ一撃とは違い、十分に力が乗ったその一撃を防ぐことが出来ず、ハクヤとは逆の雑貨屋のカウンターテーブルを破壊しながら突っ込んでいった。

反応速度はハクヤよりも速いのだが、戦闘中に気を抜くのはよろしくないな。それに力で圧倒的に劣っているなら馬鹿正直に正面から攻撃を防ぐのはあまり褒められたことでは無い。

私が腕を組みながら二人の戦いを観察しているとミノタウロスがこちらに向き直りながら鼻息荒く口を開く。

「雑魚ハカタツケタ。次ハオマエダ」

二人に付けられた傷口から大量の血を流しながらミノタウロスがこちらに歩み寄ってくる。

血まみれになってまで頑張っているところ水を差すようで悪いのだが一つ忠告をしてやろう。

「あれで片付いただと？　あまりあの二人を舐めない方がいいぞ？」

私がそう言い終わるか終らないかのタイミングで半壊していると、言っても過言では無い建物から二つの影が同時に飛び出して来る。

飛び出して来たのは無論ハクヤとコクエだ。二人とも吹き飛ばされた際に身体中を打ちつけたのか服もボロボロになり、頭から流れ出た血が顔の半面を濡らしていたが構う様子も無くミノタウロスに向かつて突進する。

その手に持っていた太刀は鞘に納められている。

納刀状態の太刀の柄を持ち、一息に間合いを詰めた二人はミノタウロスに向け抜刀する。

二人の構えは俗に『居合抜き』と呼ばれる物で、鞘から刀剣を抜く際の抵抗を利用し、通常の斬撃の何倍もの威力、速度を乗せることが出来る剣術だ。

当然、得物である太刀を戦闘中に鞘に納めてしまうのだから、一朝一夕で出来る技術では無く、下手な者がやればただの自殺行為だ。まあ、その点は私と初めて出会った時点ですでにかなりの技術を有していたことを鑑みれば問題は無いだろう。

先程までの斬撃とは比べ物にならない威力を内包した二振りの太刀が空を割いてミノタウロスを襲う。

ハクヤの放った一撃はすでに血まみれになっている左腕を肘から下を切り飛ばし、コクエが放った一撃は女性の胸ほどある首を大きく切り裂く。

「ガッ！」

「何度も言わせんな！ お前の相手は俺達だ」

「…首、落とすと言った」

二の太刀にて止め刺そうとする二人だがミノタウロスはそれに気付くや一足飛びに後方に飛んで距離を取る。

「殺スツ！！ 殺シテヤルゾ！！！」

怒号を上げ二人との距離を一気に縮める。死を賭した突進はまさに手負いの獣の危うさを体現している。

果たしてこの二人にそれを退けることができるのか…と、まあどうやら要らぬ心配であったようだ。

「アレやるぞ、コクエ！」

「…承知」

再び太刀を鞘に納め、コクエが前に、ハクヤがその後ろに立つて共にやや腰を落とした居合いの構えを取る。

「ハッ！ ソレデハ一人シカ剣ヲフルエマイ」

ミノタウロスが馬鹿にしたように鼻を鳴らしてそのまま突進を続ける。

しかし、その顔が驚愕に支配される。

予備動作も無しに前にいたコクエの身体が前方に倒れるように傾いたのだ。

そしてその背を舐めるようにハクヤの居合抜きが疾る。

が、前にコクエが居る為、射程が短い。事態を察して突進を二人の前で止めたミノタウロスの腹部を掠めるに止まる。

「ハッ！ 詰メガ……」

「止めは譲るぞ、コクエ」

ミノタウロスの侮蔑の言葉をハクヤが遮る。

「…首、貰うよ」

不意にコクエが声を発する。

その身体は超低位置で居合の構えを取っている。

「…何ッ！」

それがミノタウロスの最期の言葉となる。

「はあああああああ！……！」

コクエの身体が跳ねるように飛び上り抜刀と共に柄のトリガーを引く。

柄が明滅し太刀の背にある噴出口から爆風が噴出され、打ち出されるような勢いで放たれた太刀が更にその速度を増す。

交錯。

抵抗する間もなく棒立ちであったミノタウロスの首が後ろ向きに落ちて血潮をまき散らす。

「よ……つつつしゃあああああ！……！ やりましたよししよ……」

ハクヤが歓喜の声を上げて喜び、ガバツ、と音がしそうな勢いで

後ろを振り向き…、怪訝な顔をする。

「どうした？ ハクヤ」

「またも音がしそうな程の勢いで今度は横に
つまりは私たちが居る方へと向く。」

「何時そつちに移動したんですか…？」

「お前らが吹き飛ばされて戻ってきた辺りからだな。真後ろからでは見えんのでな」

「…護衛対象が勝手に動かない」

肩を竦めて答えると、近づいて来たコクエに窘められる。

「…以後注意しよう」

私は苦笑いを浮かべながらそう答え、上を向く。

私に倅いコクエ、近づいて来ていたハクヤも上を向く。

隣にいたアレクも同様に、上を向いている。

「来たか……忙せわしないな」

「来ましたねえ…」

私の呟きにアレクが同意する。何のことが分からないといった顔のハクヤが何かを言おうとした瞬間、上空から飛来してきた無数の炎の弾丸が私たちの周囲一帯に降り注いだ。

第七話 弟子は二人で舞い踊る（後書き）

弟子君たちが手にしているガン・ブレード。

本作では魔力を使って爆発を起こすため、薬莖やら何やらが必要無くなり軽量化しています。

詳しいことは追々書いていくことになるかと思えますのであまり突っ込んだ内容は書きません。が、何か元ネタがあったりするのですが、わかりますかね…？

（分かりづらいため9/7訂正）

第八話 A n e m y o r a f r i e n d

無数、否、その言い方はあまり正しくないかもしれない。
まるで豪雨。

私たちの周り一帯をほぼ隙間無く降り注いだ火球は足下の路面を破壊し、辺りに点在している露店に引火していく。

当然、その只中に居る私たちは無事な訳が無い……のだが。
私たち四人の周りに、まるで不可視の盾でもあるかの様に炎が避けていく。

…まあ誰がやったかは考えるまでも無いのだが。

ちなみにコクエは何が起こっているのか分からないのか、珍しく呆けた顔をしている。ハクヤに至っては腰を抜かしたのか座り込んでいる。

コラコラ、そんな調子では何時まで経っても強くなれないぞ。……とは言うものの先程の戦闘で緊張の糸が切れてしまったのだろう。集中力が切れた瞬間にこの『爆撃』だ。しょうがないと言えばしょうがないのかもしれない。

一分程だろうか。ようやく火球が収まる。それと同時に周りから不可視の盾の気配が消える。

私は無言で隣のアレクの頭を撫でると一歩前が出る。

「おい、さっさと出て来い」

正面、何も無い空間に向かって剣を構え声を掛ける。

「あれ？ 何でここにいるとわかったんですか？」

視線の先から少し高めの声が響くと、前方の視界が歪んで捲れ、手が覗く。

その手が空間を裂くように横薙ぎにされるとその全身が現れる。赤い短髪に利発そうな顔、全身に奇妙な刺青を入れた小柄な少年が裂いた空間を跨ぎこちらに出てくる。その少年は不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。

「それに何で無傷なんです？ アレって避けられるような攻撃じゃないんですけど」

「さあな。お前が下手糞なだけだろ」

「あつ、酷いな。取り付く島も無しですか」

答える義理も無いので適当にあしらうと少年は更に笑みを深くする。

「ま、いいです。僕の名前はドーラはといいます。少しだけお相手願います」

「なっ!？」

「…くっ!」

それだけ言うと唐突にこちらに飛び出して私に両の手を向ける。咄嗟に私の前に飛び出したハクヤとコクエが身構えるが、向けられた細い腕が突如として鱗が鈍く光る巨腕に変化して二人を吹き飛ばす。

「邪魔ですよ。雑魚には用はありませんので」

その巨大化した両腕を更に伸ばし、私を挟むようにして捕まえようとする。

それを飛んでかわすとそのまま腕に飛び乗り相変わらず笑顔のまま

まの少年　　ドーラに向け疾駆する。

そのままの勢いで右足を振り上げ、無防備な顔面を狙うがドーラの背中から現れた黄色の翼に弾かれ、バランスが崩れた所で後ろに弾き飛ばされる。

転がるように後ろに下がる私をアレクが受け止め……質量の違いから共倒れする。

「……や、無理だと思ったら避けていいんだぞ」

「夫のすべてを受け止めるのもまた妻の役目………がくっ」

自ら効果音を付けながら路面にうな垂れるように死んだふりをするアレク。

「…あいつは私が相手する。お前はあいつらと一緒に下がっていてくれ」

「んんん……大丈夫なんですか？」

「まあ、さすがに手こずりそうだが………あいつ等には荷が重いだろう」

「なんなら私も出ましようか？」

顔だけ上げて心配そうな顔をするアレクの頭を撫でドーラの方へ向き直る。

「お前が出ると周りかな……。それにその姿のままではもうそろそろ魔力が切れる頃だろ？」

私がそついうと後ろでムムム、と唸り声が聞こえてくる。

「………気付いてたんですか？」

まあそれなりに長い付き合いだからな。

魔法とは体内で産み出される力、謂わば生命力を魔力に変換し、呪言を高密度に圧縮した圧縮言語や魔力を込めた四肢や武器を使って展開した集束陣で凝縮し、何らかの属性を付加させ対象に向けて打ち出す技術だ。

他にも錬成や医術にもそれを使うことがあるが、まあ戦闘にはあまり関係しないため説明は省くが、それらの魔法は総じて生命力を糧としている以上、無理をすれば寿命を縮めることになるのは説明するまでもない。

……今の彼女のままで、だが。

「と、いうわけだ。今回は下がっている」

しばらく唸り声が聞こえていたがようやく諦めが付いたのか、気を付けてくださいね、と一言残してアレクは後ろに飛び退った。

視線をドーラから外さず、更に後方に飛ばされていたハクヤとコクエに声を掛ける。

「師匠、俺たち……」

「……師、私たちは師の護衛。なのに……」

「お前たちは良くやったよ。だから今は少し休んでいる」

『……』

「私が負けると思うか？ それに師の戦いを見るのもまた修行だぞ？」

そう言って冗談めかして肩を竦める。二人はまだ何か言いたそうな気配であったが鈍い打撃音が二度した後、沈黙する。

その後に、ずりずりと重い物を引きずる音と、アレクの掛け声が

聞こえたが何が起こったかは考えないことにする。

「さて……わざわざ待つてくれるとは少し意外だったな」

「もともと用があるのは白銀さん一人ですから一人で来てくれるならこちらとしても助かるんですよ。それに僕、不意打ち嫌いなんですよ」

私の言葉にドーラがいけしゃあしゃあと応える。

…それがいきなり火球の雨を降らした奴が言う言葉であろうか。

飄々とした口調で話すドーラの姿はもはや初めに見せていた少年のソレでは無かった。

一言で言えば龍^{ドラゴン}。

全身を光沢のある黄色い鱗に覆われた巨躯。

先程巨大化した腕は新たに現れた脚と共にその巨体を支え、背には対の翼が生えている。

その巨躯の更の上　長い鎌首の頂点では深い叡知^{えいち}を感じさせる紅の瞳が光を放っている。

……黄龍。

その圧倒的な神々しさに思わず息を飲む。

龍族は口キ級の魔物の中でも一般に広く知られている眷属で、時折人間の前に現れては圧倒的な力でもって辺り一帯を蹂躪すると言う災害みたいな魔物、と師匠から聞いたことがあったような。

………もつとも『不眠不休の死の訓練』と銘打たれた苦行の最中に師から聞かされた内容なのでうる覚えだが。

「それにしても本当にどうやったんですか？さっきの広範囲爆撃は

この姿であなたの魔力を狙って撃ちこんだんですよ。外れるわけが……」

心底不思議そうに独りごちるドーラ。

…私としてはその姿形で先程と変わらない声を出している声帯ややたらと豊富な表情の方が遥かに不思議だ。

不意にその視線が私の後ろに飛び、その眼が見開かれ、頬が歪められる。

「……まさかその後ろの子、『厄災』ですか？」

「さあ？どうだろうな」

再び質問をあしらうとそのまま走りだす。

間合いは十メートル前後。

相手は『ブレス』がある分、中長距離戦闘では些か分が悪いかならば距離を詰めて近接戦闘に持ち込むのがベストであろう。

当然、相手もそれを黙って見過ごすわけではない……、筈なのだが、何故か易々と間合いの中に私を入れる。

畏か？

一瞬、そのような疑念が頭をよぎるが、退くことはせずにそのまま更に間合いを詰めて相手の右前脚に剣を振り下ろす。

剣が脚に触れるか触れないかの瞬間、その巨軀からは想像できないほどの俊敏さでドーラが後ろに下がる。

私は振り下ろした剣もそのままに強引に前へ歩を進め、ドーラが着地する瞬間を狙う。

剣が先程とは逆の軌道を描いて巨軀の胴へと迫るが、今度は両翼をはためかせ着地のタイミングをずらされる。

その勢いそのままドーラが距離を取るが、当然ただで逃がすつもりはない。逆手で懐から抜き出したヒドウンのトリガーを連続して引く。

無数の炎の弾丸はドーラへと殺到し、その巨軀を炎で包むが再び翼をはためかせるとその炎はすぐさま消え去る。

「……………ロキ級には流石に効かないか」

わかっていた事とはいえほとんど無傷の姿を見て顔が歪む。

……………どうするか？あの鱗ではヒドゥン程度の魔力は弾かれるか。第一、炎のプレスを吐く龍族に炎の弾丸は効く訳がない。しかし、今持っているのは赤のカートリッジしかない。というか試作品の為此のカートリッジしか貰っていないのだ。

「あの……………、白銀さん。お話しがあるのですが……………」

となると剣戟けんげきだろうか？しかし間の悪いことに今持っているこの剣は代替品だ。ケルベロス等のファイア級魔族程度なら物の数ではないが、さすがに龍族の鱗と打ち合わせるには分が悪いが。

他に手が無い訳ではないのだが正直気が進まない。周りへの被害も大きいし何より……………。

「ええと、聞こえていますか？あの〜、白銀さん」

……………ん？ああ、また考え事をしていた。驚くほどの劣勢さに若干我を失ってしまった。

そんな私の様子を見てドーラは何やら不安そうな顔をしてこちらを見ている。

……………何かひどく馬鹿にされているような気がするが気のせいだろうか？

「…まず、今回の無礼な行動をお許してください。我が主の要望であ
なたの力を試しました。しかし、先に言っておきたいのですが今回
の都市襲撃は僕とは無関係なのです」

…。

……。

………は？

あまりに突拍子も無い内容に思わず呆けた顔になる。

そんな私の顔を見てか、ドーラは少し口元を緩めて言葉を繋げる。

「ここからが本題なのですが、我が主であるリオゼール王国の国王
があなたを雇いたいと。実際のところは共闘する形にしたいそうな
のですが……」

こちらを様子を窺うように向けられる視線に自然コメカミに鈍痛
が…。

何よりも情報が足りない。

「………アレク、何か情報はないか？」

そう思い直してドーラに対しての警戒を解かず、後ろに居るアレ
クに話しかける。

が、反応が無い。背筋に寒いものが走る。

「………っ！アレクっ！！」

最悪の光景を想像して思わず出た舌打ちと共に後ろを振り向く。

「……きつ食へられませんか……んにゅ」

立ったまま寝ていやがった。

第八話 A n e m y o r a f r i e n d (後書き)

次回の更新時、一気に文章を直したり、纏めたりしたいな、と思っています。

少しは読みやすくしなければ…。

感想やら何やらを頂けると嬉しいです。

第九話 白銀は意外と大胆で

ステラツイオから西に抜けると大国であるガゼインへと続く山道に出る。

その山道は一言で言えば過酷。整備されているとはいえ、ややもすれば遭難者が出るほどややこしい道にそこを通る人間を狙う野生の獣に魔物がいる。

よほど先を急ぐ場合でなければ迂回路を取るのが賢明な道である。しかし、ステラツイオにやってくる他国からの食糧は魚介類など総じて足が早い。

迂回路を取れば新鮮な食糧は腐ってしまったため強引にこの山道を通ろうとする者も後を絶たない。

「ハアアアツ！」

「ヤアアアツ！」

裂帛の気合いと共に打ち出される左右からの木刀を受けずに後ろに一步下がって避ける。

私たちはその道程に幾つも点在する宿場町の一つに来て早々、食料だけ買いこみ町の外れから人気の無い森に入っていた。

「当たれっ!!！」

「……っ!!！」

今度は大上段から振り下ろされる一撃を見つつ足を刈ろうと地を這う斬撃を踏みつけて止め、出来た間隙に身を滑り込ませ頭上からの一撃を交わす。

『えっ!?!』

その一撃が地面を叩いた時には私が手にした木刀がハクヤの頭を小突いていた。

「十回目か？」

それだけ呟くと欠伸を噛み殺す。

「二人掛かりでその程度では素手でも十分だな」

手に持っている木刀は二人の額を小突く以外は未だ未使用だ。

「そこまで…、そこまで馬鹿にしなくても……」

「……………アレ、やるよ」

泣きそうな顔をしているハクヤに珍しくコクエが声を掛ける。

ハクヤも驚いたようにコクエを見るが、声を掛けた当の本人はさして気にした風も無い。

…ふむ、コクエの雰囲気は少し変わった。何かを仕掛けるつもりか？

二人が私から少し距離を取るとその場で抜刀の構えを取る。

「…行くよ」

コクエがそれだけ呟くと二人は自らの着物の糸を抜刀の勢いと共に抜き去った。

話は二日前に遡る。

目くるめく不安と共に振り向いた私を待っていたのはいつそ清々しいまでの寝顔だった。

……一瞬我を失ったがよく考えれば理由は明白であり、原因もまた明白であった。

そう考えると無理に起こすのも気が進まないのだが事態が事態だ。少しの間だけ起きてもらわねばなるまい。

私は溜め息を付きながらアレクの居る方に歩き出す。

無論、ドーラに背を向けることになるため、意識だけはそちらに向いているのだが。

「……………ふふふ。あはははっ！」

背後から聞こえてきたドーラの笑い声に思いきり顔を顰めながら歩みを止めて後ろに振り向く。

「…何を笑っている」

笑いが収まらない様子のドーラに思いきり嫌そうな顔を向ける。

「……………いや、すみません。この状況で眠れるものなんだな、と思いまして」

未だ笑みが残っている顔で弁明をする。

……………というかこのドラゴンはどれだけ感情豊かなのだろうか。つい油断すると普通の人間を相手にしている気分になる。

「……………んんん、…あれ？　ここはどこでしょうか？」

ドーラの笑い声で目が覚めたのかアレクが目を擦って辺りを見回している。

改めて前を向いてアレクの視線に合わせるように膝を折って話しかける。

「アレク、疲れているところすまないが情報が欲しい」

「…え、私のことが欲しいんですか？ いやらしいですねえ、こんなところで…イテッ」

何やら暴走しているアレクをチョップして止める。

後ろで再び笑いの気配が起こるがいちいち反応しては話が進まなため無視を決め込む。

「…リオゼールの国王にドラゴンがついているという情報はありますか？」

「ドラゴンの情報ですか？ え〜と…あゝ、あるにはありますが…」

「あるにはあるが？どうしたんだ？」

珍しく語尾を濁すアレクに眉をひそ顰めて問いただす。

「なんと言いますか、噂話クラスに不確かな情報なんです…」

「まあ、僕はいつも人化してますし、国王が危険にさらされた時にだけしか顔を出しませんから」

申し訳なさそうに話すアレクに後ろでドーラが付け足す。

アレク程の情報屋が掴めないとなると本格的に黒子に徹しているのか、もしくははまったくの大嘘なのか。

少し思考し、溜め息一つ吐いて立ち上がる。

「いいだろう、とりあえずお前の言うことを信じよう」

「……………えっ？ 信じてもらえるのですか？自分で言うのもなんですがかなり信用ならないと思うのですが」

よほど驚いているのか支離滅裂な事を口走っているドーラに今度は私が苦笑する。

「師匠の口癖でな、分からないことがあつたら自分の勘を信じろ、とか言っていた」

「随分と大雑把な方ですね…。いえ、こちらとしては信じて頂けて非常にありがたいのですが…」

「まあ、私の質問に答えられたらだかな」

微妙な顔をしているドーラの顔を見ながら頭の中の疑問を整理していく。

「そうだな…、まずお前が今回の襲撃に関係していないとはどういうことだ？」

「この襲撃はあなたも知っているとありますが王国の太子が独断であなたの抹殺を企て、独断で動いています」

「確かにそれは知っている。だが、いかに独断とはいえ普通ならばお前たちは太子側、もしくは我関せずの中立的立場を取るのではな
いか？」

「確かに普通ならば国王もこれといって動く理由もありません。当初は予定通り中立的立場を取るつもりでしたが……が、事態が変わりました」

ドーラはそこで一つ間を置き吐き出すように話を続ける。

「太子は取り入ってきた私たちの仲間の力に溺れ、あるうことが実父である国王の暗殺を目論みだしたのです」

ドーラの顔は目に見える程暗くなっている。

…なるほどな。あのすつとこどつこいが考えそうなことだ。

まあ、ロキ級の魔物の傀儡かいらいとなっている可能性もあるが。

「だから共闘か。ではこの襲撃の頭は誰だ？ 何者かが私を索敵してケルベロスを配置しているようだったが」

「それはわかりませんが、僕の感覚にも引っかかりませんでしたからよほど高位の者だとは思いますが」

ドラゴンの索敵網に掛からないとなるとやはりロキ級が直接動いていたのは確かなようだ。

「…まあ大体わかった。次の質問だが何故こんな所でいきなり広範囲爆撃など行った？ 一般人に被害が出るとは考えなかったのか」

「不意打ちをしたのはあなたが少ない選択肢の中でどう動くのかわりたかったからです。ちなみに近くに一般人は感知しませんでしたし、一応半径1キロには結界を張っていたので近くにすることも無かったはず」

よくもまあそんな馬鹿デカイ結界を…。

「本当は超広範囲法陣で辺りの小物を一掃するつもりでしたが展開に時間が掛かっている間に皆さんがほとんど倒してしまっただので、そのままそれを流用して腕試しを敢行したわけ」

「そんな物を流用するな。通りで馬鹿みたいに長い攻撃だったわけ

だ……………」

先程とは違いしれっと答えるドーラに呆れながら目を細める。

それと同時に微かだが遠くの方から幾つもの足音が聞こえてくる。

「…おいっ」

「さすがに疲れたので先程結界は解いてしまいました」

……………何だと？

「僕も聞きたいことがあります。今日はここまでにしましょう」

それだけ言うとドーラの姿が透過していく。

「二日後の昼、セレーヌの宿場町の酒場で会いましょう。それまではあまり派手な動きは控えてくださいね」

「セレーヌ……………？ 待てっ、そこはマズイ！」

私の静止の声を聞かずにそのまま気配を消すドーラ。

嫌な予感が背筋を撫でる。

…いや、そんな馬鹿な事は起こるまい。

それにあの人は世界中を放浪しているはずだ。いくらあの人の故郷だからといってもそう都合よくいるわけがない。

そんな気休めを考えながら私はアレクをおぶさり、寝ている二人を抱えその場を離れたのだった。

そして今現在、宿場町、セレーヌの外れにいるわけである。

「十一回目、初めて木刀を使わせたな」

「……………」

悔しそうに下唇を噛み締めているコクエの頭を撫で、後ろで魔方阵の上に座り込み、うんうんと唸っているアレクに顔を向ける。

「どうだ？ 連絡はとれそうか？」

「もうそろそろ戻ってくるはず……あつ、きました！」

アレクが指をさす方に目を向けると曇り無き青空の中に黒点が生じている。

その黒点は次第に大きくなりそのシルエットもはっきり視認出来るようになる。

その姿は猛禽モウキョウの王、タカに似ているが幾重にも重なっている尾や背の羽の眩しいまでの配色、何よりその尺度の違いは野生のソレとは明確な違いを有していた。

アレは術士の魔力と数枚の鳥の羽で形作られた『召喚獣』という生き物だ。

今こちらに飛んできているのは風魔と呼ばれる召喚獣でアレクは主に密偵や伝言に使っている。

密偵や伝言デンゴごときにこのレベルの召喚獣を呼ぶ必要は無いのだが本人曰く『ある程度大きくないと維持するのが大変でして。細かい魔力の調整が出来る人はスゴイですねえ、尊敬します！』だそうだ。私としては明らかに破戒陣クラスを集束陣が必要なソレを魔方阵クラスで具現化出来るアレクの方が何倍も尊敬される対象だと思っただが、あまり褒めると何を言い出すかわからないので黙っている。

そんなことを考えていると風魔はいつの間にかアレクのすぐ目の前にまで来ており、首に括りつけられた手紙を器用にクチバシで銜え、アレクに差し出す。

「あれ、召喚獣？ 初めて見た」

「すつげえ…つてか、でかつ」

隣にいる二人は非常に新鮮な感想を漏らしながらその光景に見入っている。

アレクは自分の背丈ほどある風魔から受け取った手紙の内容を確認しながら眉を顰める。

「んん、少し遠い所にいるみたいですね。ガラテアだそうですよ」

「ガラテア…あの南の境界の地か。確かに遠いな」

「こつちには向かって来てくれるそうですが、数日はかかるでしょうね」

ちょうどここから真南にある辺り一面が森に囲まれている地、ガラテアからここまでではどんなに急いでも3日から4日はかかる。

正直、借りばかり出来ていて会いたくない相手なのだが事態はそれを許してはくれそうにない。

「誰の話をしてるんですか？」

「…ああ、お前たちが言っていたエメラルド色の髪をしたマッドサイエンティストだ。預けている物があつてな」

事態を知らないハクヤに説明をしながら木の根元に置いておいた麻袋からパンと水を取り出し三人に手渡していく。

「とりあえず休憩だ。私は少し用があるから町に行つて来る」

「今日でしたね……、一緒に行きましようか？」

「大丈夫だ、心配するな。それより頼みたいことがある」

心配そうな顔をするアレクに宥めながら視線をハクヤとコクエに移す。

「こいつらの相手をしてやってくれ。まあ、手加減してな」

「えへっ!？」

「……………」

ハクヤは飲んでいた水を奇怪な音を出して吐き出し、コクエはこちらに胡乱げに見ている。

どうやら納得がいかないらしい。

「構わないですけど報酬は弾んでもらいますよ?」

「…考えておこう」

「ちょっと待ってくださいよ! さすがにこんな小さい子を相手にするのは…」

「…怪我させちゃうよ」

「だ〜いじょぶですよ!! お二人の攻撃くらい屁でもないですから!」

……沈黙が辺りを支配する。

本人としては二人に心配をさせまいとフォローを入れたつもりなのだろうが、残念、言葉が悪い。

「…まあ実際にお前たちとは格が違うからな」

「…えっ?」

「やってみればわかると思うがお前らの攻撃では当たらないぞ」

肯定する私の言葉に二人は驚いたようにこちらを見やる。

「そうだな。休憩の前に一戦やってみるといい」

麻袋の近くに置いておいた木刀をアレクに手渡し、代わりにパンと水を受け取る。

「そらっ、ボケっとするな」

「あっ……、はい！」

「……………」

呆けている二人を促して少し離れた位置まで下がる。

「じゃあ、じゃんじゃんバリバリ来てください！」

「あ……、はい」

木刀を振り回しながら威勢良く宣言するアレクにハクヤが辟易した顔をしながら返事をする。

パツと見、アレクの木刀の使い方は素人丸出しでいくらでも打ち込む隙がある……………、ように見える。

「…行くよ」

「あっ、ちよつと待てコクエ！」

チャンスと見たのかコクエが一息に飛び出し糸を抜き取った着物の裾をはためかせ、アレクの視界を奪い右側に飛び、居合いの構えを取る。

先程、ハクヤとコクエが着物から糸を抜き取ったのは当然理由が

ある。

剣舞によりはためく黒と白の裾は相手の視界を奪い、混乱させるのだ。

もちろんそれは二人が交互に、時に同時に攻撃をするからであって、お互いの絶対のコンビネーションが無ければ当然破綻する戦略だ。

まあ、一人でも短期間ならば目くらまし位にはなるが。

「ヤアアアッ！」

アレクの左側から放たれた居合抜きは腕を狙い進む。

絶対の角度、絶対の速度、絶対のタイミングで放たれたそれはしかし弾かれる。

「…えっ？」

「今度は俺の番ッ！」

自信を持って放たれた一撃を視線すら向けられずに止められたことに思わず呆けた声をあげるコクエに代わりハクヤが飛び出す。

唸りを上げてコクエとは逆軌道に放たれた居合いも壁にぶつかつたように弾き返される。

「何で!？」

「残念でした。じゃあ休憩にしましょうか」

驚く二人の額が順番に小突かれる。

「言っただろ？ 当たらないって」

「何で視線も向けずに……? いったいどういつからくりしてるんですか？」

「…見えない何かに巻き込まれるみたいに弾かれた」
「そうだな…。普通に教えても修行にならないし帰ってくるまでの宿題しておくか。見極めろ、わからなかったら今日の夕飯係はお前たちだ」

それだけ言うとパンと水を再びアレクに返し、踵を返す。

…確か、町の酒場だったな。

後生だからあの人はいないでほしい…。

第九話 白銀は意外と大胆で（後書き）

レポートなどに追われる夢を見ました。

萎れそうです……。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

第十話 史上最強の師匠

森を抜け出てセレーヌに再び戻ってくる頃にはすでに日は頂点に昇っていた。

時期的に秋が過ぎ冬になるうとしていている辺りで、昼といえどもさすがに冷えるというものだ。

「とりあえず服を買うか……」

何を隠そうステラツイオでの騒動から逃げるように此処まで来たため、返り血や自らの血、こぼしたコーヒードで汚れた衣服は当然そのままだ。

ここに着いた直後に買うつもりだったのだがハクヤとコクエに、稽古をつけてやる、と言ったら『行きましょう！！ すぐに！』と急かされてしまい結局食糧を買い込むのみとなってしまった。

あの二人は汚れた服のままでも気にもならないのか町民の奇異の視線も素知らぬ顔であった。まあ、あの服の替えがそう簡単に見つかると思えないが。

アレクに至っては少しいなくなっただけだと思っただけの間にか風呂に入って新しい服まで着ていた。現在、黒のミニフレアに桃色の薄いTシャツという服装なのだが寒くないのだろうか？

森を抜けて町に戻ってきた私の目的地は当初の予定通り雑服屋だ。

……まあ、その目的地がどこにあるかまでは覚えてないが、良く考えてみれば酒場もどこにあったか……。

とりあえず歩きながら探そうかと一歩足を出した瞬間、何者かに肩を掴まれた。

「おおっ！？ デュオじゃないか！」

…………… 嗚呼、神よ。我が後生なる願いはそれほど簡単に覆されるものなのか。

「…何だ、その顔。なんでそんな泣きそうな顔してるんだよ」

「…………… いえ、再会の感動に身を震わせているだけです」

振り返った先にいたのは絶世の美女でありながら世界最強と謳われる、我が師匠 クレイン K・ゼニスが困ったように赤く長い髪を掻き上げて眉を顰めていた。

「…………… へえ、随分と楽しそうな話になってるなあ」

頭の後ろの方で両手を組み、赤髪を揺らしながら心底楽しそうに歩く我が師匠にそこはかとなくイラつく。

私の後生の願はかないも儂く散り、結局師匠とエンカウトしてしまっただため、事のあらましを話すこととなってしまうた。

「…そんな面白いもんじゃないですよ」

「はははっ！ そんなぶーたれた顔すんなよ。服買ってやったんだから機嫌直せ」

捕まってしまった後に服の汚れを指摘され、半ば強引に新しい服を買われてしまった。

黒のタートルネックのセーターにジーンズと師匠にしては普通のセレクトだ。

正直全身赤尽くめ位は覚悟していたが…。

「それにしてもアレクまで来てるのか、久し振りに会いたいなあ」

「今、私の弟子の相手をしてもらっていますか」

「弟子ツ！？ お前そんなもんとってたのか？」

この人にしては珍しく驚いているようだ。

そういえば言っただけでなかった。最後に師匠と会ったのがアレクを連れてくる時だったからな。

「……確かにお前は教えるのに向いてるかもなあ。なんだかんだで面倒見もいいし、なんかお母さんばいし」

顎に手をやって考え込むように何やらぶつぶつと呟いている。

………お母さんばいとはどういった見ださるうか？

確かに料理も碌に出来ない師匠といたせいで炊事洗濯がやたらとうまくなったのは認めるが…。

「それに私の華麗なる教育技術も引き継いでいるわけだしな！」

少年のように屈託も無く笑う師匠。

ええ、とても役に立っていますよ。反面教師として。

しばらく近況報告するような取り留めの無い会話をしながら歩くこと数分、目に入ってきた木造の建物を師匠が指差す。

「あそこだな」

「なるほど、あそこですか。…わざわざ道案内ありがとうございます。まあ師匠ならライオンも襲した。帰り道は気を付けてくださいな。まあ師匠ならライオンも襲

わないでしようけど」

早口で捲し立て、逃げるようにして歩を進めたが後ろから再び肩を掴まれる。

「やだなあ〜デュオ君。私がこんな面白そうなこと放っておくわけ無いじゃないか」

…まあそつでしようね。

むんずと掴まれた肩がビクともしないところからこの人がいかにこの件に関して興味津々か伺い知れる。

「……あまり口を出さないで下さいよ」

「りょうか〜い」

どこまで分かっているのか、パタパタと手を振りながら答えるその姿を見て自然と溜め息が出る。

「……ともかく、勝手に暴れないで下さいよ」

「だあ〜いじょぶだつて！ 暴れるときはお前に聞くからっ！」

舌を出してサムズアップする姿を見て更に不安になったのはいうまでもない。

酒場に入ると同時にタバコと酒、何が理由か分からないような据えた臭いがした。こんな臭いがするのはこついつた酒場と独り暮らしの男の家くらいだろう。

真つ昼間だというのに中には思っている以上に人間があり、各々ビリヤードやダーツ、ポーカ等に興じていた。

「んじゃ、酒もらってくる」

そういつてカウンターに歩いていく師匠。

師匠に酒を持ってこさせるのは弟子としてあまりよろしくない気がするが慣れぬ人間が下手な注文をするよりはよいであろう。

せめて場所を取っておこうと出来るだけ人がいないところを探している赤い単髪の青年と目が合う。

その青年は前からこちらに気付いていたのか目が合うと微笑する。

…まさか。

座っていたその青年がボトルを片手にこちらまで歩いてくる。

「お久しぶりですね、デユオさん」

「……何で背が伸びてるんだ？」

「お酒は二十歳から、ですよ」

赤い髪の青年　ドーラは笑いながら答えて私が座る丸テーブルの椅子に腰を掛ける。

よくよく考えれば龍の姿から人間の姿に変化出来るのだから、少し齢を重ねるくらいは訳ないのかもしれない。

「さて、早速本題なんですけど……」

「おーい、酒持ってきたぞ」

ドーラの話さ酒瓶を指の股に挟んでブラブラさせながら歩いてきた師匠が遮る。

間が悪いことこの上ない。

「……えーと、あなたは？」

「んん？ あー、お前が噂のドラゴンかぁ。私はその馬鹿弟子の師匠さ」

「誰が馬鹿ですか。話がややこしくなるからとりあえず黙っていてください」

「はいはい、黙っていますよー」

師匠はそう言つと椅子に座つて持ってきた酒瓶に手をつけ出した。

「えー、いいんでしょうか…？」

「構わない。相手にしていたら日が暮れてしまつ」

「そつという言い方は無いと思うぞー。母さん悲しいな」

「……………それでは本題に入るが」

……………もう、なんといいのか。相手にしていたら本当に日が暮れてしまいそつなので聞こえなかったことにして無視することにする。

「お前はこんな所で呑気にしていていいのか？お前の主は暗殺されそつなのではないのか？」

太子は国王の命を狙っていると言つていた。国王を主としているならば常につき従っているべきであろう。

「現在、太子はリオゼールから東にある軍事国家シルフィアとの国境防衛戦に駆り出されていますから当面はそちらで手いっぱいになるはず、でした」

前に話した時同様、良くないことがあるのかそこで一区切り置く。通常ならば国境防衛などの危険な任務に将来の国王候補である者が配置されるわけではない。

ましてや相手は辺りの国を無差別に飲み込むと噂の軍事国家シルフィアだ。国境の防衛はおそらく国内で最も危険な任務であろう。

「確か、シルフィアの方が劣勢なんじゃなかったか？何でも、統率された魔物と人間の混合軍に襲われたとか何とか」

「その通りです。しかも国境の防衛だけではなく、直接シルフィアを落とすつもりのようなのです」

どこから持って来たのか、つまみのクルミを素手で割りながら話す師匠にドーラが補足する。

「シルフィアを落とす…？ 何だ、主旨が変わってないか？」

「……おそらくですが、太子はクーデターを起こすつもりなのかもしれません」

「ん？ ただ国王の座が欲しいだけなら国王を暗殺するだけでいいのではないのか？」

「リオゼールでは国王が不慮の死で正式な戴冠の儀が行われなかった場合は残された遺書が最も効力を持ちます」

つまりはそこに自らの名前が書いていないことを身に染みて知っているあの馬鹿は外で集めた兵でクーデターを起こす、というわけか。

……………浅はかだな。

「クーデターってのは市民の支持を得られなければ必ず頓挫するかなあ。人間の兵じゃなきゃ市民が逃げるし、かといってリオゼールじゃ自分を押ししてくれる奴なんていないだろうしな。下手すれば一気に独裁政治に移行^{うつ}るかもな」

「おそろくあと半月、支配者級がいるならばそれ以上は時間は無い

でしょう」

支配者級、つまりロキ級の魔物が表立った行動を取らないとはいえシルフィアも保^もって半月、それであちらの情勢が整うということか。

「僕もこれから国王の周りを離れるわけにはいかなくなるでしょう」
「…前から思っていたんだがお前は どうしてそんなに国王に固執する。お前からから見ればたかが人間だぞ」

「魔物は通常、利害関係なしに人間に取り入ることは無い。
だが、目の前にいるドラゴンからはそのような邪念が一向に感じられなかった。」

「……………そうですね。一言で言うなら『仁義』でしょうか」
乾いた笑みを浮かべながらドーラは遠い目で虚空を見上げる。

「知つての通り僕は黄龍です。ですが、これ…」
そう言つて自らの赤い前髪を弄る。
色素は薄いがこの国では赤髪は珍しくはない。現に隣でブドウ酒をラツパ飲みしている師匠も赤髪だ。

「その髪の色がどうした？ さして珍しいものでもあるまい」
「それは普通の人ならば、です。ドラゴンは人化した場合、普通、皮膚の色と髪の色は同じになるはずなのです」

その説明に私は眉根を寄せる。言うまでもなく矛盾している。それが本当ならばドーラは金髪でなければおかしい。

不服だと顔に出ていたのかドーラが口に手を当て含み笑いをする。

「そうですね、おかしいんです。けど……なんらおかしいことはないんです」

「……言葉遊びをしたいのか？ 簡潔に言ってくれ」

「……そうですね、すいません。……噛み砕いて言えば、僕は人との混血フェルナルトなんです」

「……なんだと？」

あまりに衝撃的な内容に思わず眩くように聞き返してしまう。

人と魔物の混血。あなたがちあり得ない話ではないが正直信じられないのが本当のところだ。

「父の龍は僕を捨てて母といなくなってしまうました。幼い僕は力を押える術を知らなかったため、人に追われて、仲間にも忌み嫌われていました。生きるため、殺されぬため、飢えぬため、両の手を血に染め続けました」

ドーラの浮かべている笑みに自嘲の色が浮かぶ。

どこか苦く、悲しげで、それでも笑みは消さない。

「そんな僕の手を握ってくれたのは幼い少年でした。少年は『辛かったら泣いてもいいんだよ？』と人化すらまともにも出来ていなかった僕に言ってくれたんです。それだけで……、それだけで僕の凍った心は溶かされてしまったんです」

少しだけ明るさを取り戻したドーラはそこで息を吸う。

「命を張るには薄すぎて、理由にすらならないことかもしれません。それでも僕は護ると決めたんです。大切な心の支えを」

今度は何の気負いも無く自然と笑みを浮かべるドーラの姿に胸が少し痛む。

……………似てるな。どいつもこいつも
類は友を呼ぶとはよく言ったものだ。

「……………くっ、はははっ!!」

今まで沈黙を守っていた師匠が急に笑い出す。手では未だにクルミを弄り回している。

「最高だよっ！ 気に入った！」

「へえっ？ いたっ！」

ボンボンと思い切りドーラの背中を叩きながら、太陽のように明るく、豪快な笑みを浮かべる師匠。

どうやら師匠はいたくドーラのことを気に入ったらしい。

私としては一人で師匠の相手しなくて済みそうな展開に少し、否、かなり安堵しているのだがそれは秘密だ。

しばらく、逃げ出そうとしているドーラを弄くり回したあと、徐おもむろに席を立つ。

「よーし！ 私も少し手伝ってやるぞー」

そう言っただけオーバーフローに振りかぶると手に持ったクルミをちようど酒場に入ってきた黒装束の男達の一人に向けて投げつける。

弾丸もかくやというスピードで投げつけられたクルミは男の頭蓋を貫通し、壁にめり込む。

出鼻を挫かれた格好となった男達であったが怯むことなく酒場の中に入り布陣を組む。

どうやら暗殺者一行に嗅ぎ当てられたらしい。

「まあこんな雑魚じゃ手伝いも糞も無いかな」

腰に手をやり、ニヤニヤと笑みを浮かべて立つ姿は何処までも大胆不敵だ。

世界最強、絶対覇者、蹂躪王女。様々な渾名あだなで呼ばれるこの人は何時もこの調子だ。

「あっ！ 言うの忘れてた」

はたと手を打ちながらこちらを向くと今度は悪戯っぽく私に笑い掛ける。

「暴れるぞ、デュオ」

………勝手にしてください。

第十話 史上最強の師匠（後書き）

お師匠さまの登場です。

39歳。独身。無職（フリーの傭兵や時たまルポライター紛いなこともします）。

はい、これだけ書くと完全にダメ人間ですw

感想・評価、頂けると嬉しいです。

第十一話 続・史上最強の師匠（前書き）

後書きに今作の魔法の概念を書いています。
おヒマでしたら……。

第十一話 続・史上最強の師匠

「へえ、アサシンが五人にウィザードが四人か」

値踏みするように展開した暗殺者集団を見やる師匠は相変わらずニヤニヤと笑みを浮かべている。

暗殺者は基本的に手練れの者はごく少数、そうでない者は集団で動いている。

質が良いならば量で押す必要も無いし、質が無いならば量で押すしかない、というわけだ。

相手側は入ってきて早々、頭を撃ち抜かれたアサシンを含めて十人。少なくとも手練れの部類では無いだろう。

「クレインさん……困りますよ。毎度毎度……」

「あははは。ごめん！ マスター。そこいらのクリーニング代はきつちり出すからさ」

口を尖らせながら文句を言う酒場の店主に血だらけになっている壁を指差しながら謝る師匠。

未だ何か言いたそうな顔をしている店主だったが諦めたようにカウンターの近くにある裏口から出て行く。酒場にいた他の者たちも手早くそれに続く。

そのあまりに乱れのない動きを目にして思わず頬が歪む。

「師匠：まさか前にもおなじよう」

「さあ、まずは頭数減らしちゃおうかな！」

私の呟きを遮るようにして、腕を組みながらしきりに頭を振る師

匠を見ていると何か無性に悲しくなってくる。

暗殺者の方を見ると混乱しているのか間隔を取ってこちらの様子を窺っている。

あちらからすればターゲットは私、もしくは私とコンタクトを取っているドラだったはずだ。

だが実際に仲間を葬り、未だにふてぶてしく笑っているのは情報に無い絶世の美女。修羅場を幾つも潜り抜けているであろう暗殺者とはいえ、さすがに二の足を踏んでいるらしい。

「我は血を代償にする。骨を代償にする。命を代償にする。赤き血を流せ。白き骨を砕け。黒き命をすり潰せ。全てを贄に我は星屑の欠片を呼び出す」

組んでいた手を放し眼前に両掌を合わせて呪言を呟くと師匠の前に黄色の集束陣が展開される。複雑さからして破戒陣級か。

通常、集束陣の展開に必要な呪言は圧縮に圧縮を重ねた言語で行うため一言二言、『キー』となる言葉を唱えるだけで事は足りるのだ。

無論、詠唱を短くすれば維持に集中力が必要であったり、威力が下がるなどの弊害が起こるのだが、実戦に使うにはそれらのリスクを負ってでもスピードが求められる。

現在でも、少しでも短く、少しでも速く、と様々な国で研究が続けられている。

しかし、師匠はこれを使わない。むしろ相手に聞こえるように詠唱する。

あの人曰く『相手が何してきても関係無いから』だそうだ。

「落ちろ」

集束陣に手をかざすとそれが明滅、次の瞬間、幾筋もの雷光が蛇のようにながら暗殺者たちに向かう。

「防げっ！」

もちろんあちらも黙っていない。ウィザードたちが前に出ると赤い集束陣を展開、炎の壁が雷を防ぐために現れる。その数四枚。

「アレでは……………」

「アレじゃあな……………」

私とドローが異口同音に呟きを漏らした瞬間に雷の蛇が炎の壁と衝突する。

均衡する間も無く一瞬で雷が四枚の壁を喰い破ると暗殺者たちに突き進む。

前方にいて自らの魔法がいつも容易く破られたウィザードは反応が遅れる。

ウィザードの一人が蛇の一匹に襲われ、抵抗の間も無くその身をとり込まれて黒焦げになって打ち捨てられる。他の三人も同様に黒焦げになって床を舐めていた。

人間を飲み込み、尚、一向に威力が落ちない雷の蛇は残ったアサシンたちにも襲い掛かるが、それをかろうじて左右に飛んでかわす。雷が壁を破壊する。砂煙が舞い上がり一瞬、その場にいた全員の視界を奪う。

師匠はそれを確認すると両掌を合わせて呪言を詠唱し始める。

「……………い来い。空間などただの紙。私の腕は時空の刃。隔てる物など塵に等しい。撃ち抜け！ 引き裂け！ 突き破れ！ 条理を破って常軌を逸しろ！！！」

先程よりも長い呪言を叫びながら突き上げた師匠の右腕の先には無色の集束陣が展開する。

「出て来い！」

そしてその集束陣を突き上げた腕で『切り裂く』。

一瞬視界から消えた師匠の腕が再び現れた時にはその手には身の丈よりも遙かに大きい赤剣が握られていた。

「ちよ……………何故、人が空間を操れるんですか？」

驚愕を隠すことが出来ずにドーラが思わず私に聞いて来る。

師匠が使ったのは魔法の中でも格段に難しいとされている無属性の時空間系の魔法だ。

時空間魔法はその扱いづらさもさることながら、使用者への負担も酷く重いのだ。

下手な者が無闇に使おうものならば自らが次元の狭間に引き込まれる危険さえある。

それ故、上位の魔法使いが数日掛かりでありとあらゆる物を用意してこれまた数日掛かりで詠唱をして使う以外、人間にはほとんど使いこなせる魔法ではないのだ。

が、目の前で唱えられたアレはどう考えても何の用意もされていない即興魔法である。

「……………まあ、スペックが違うからな」

「……………そ、そうなんですか？」

正直なところ、そうとしか言いようがない。昔、本人に聞いてみ

たのだが『みんな出来るんじゃないのか？』と完全に的外れな事を言っていた。

無機物しか移動出来ない、とも言っていたが、それでもやはり人の限界など余裕で超えているのは疑いようも無いであろう。

砂煙を破り疾走してくるアサシンの一人が短刀を逆手に持って師匠に斬りかかる。

「無駄だな」

短い言葉とともに雷光が迸る。

一刀目。最初に突っかかってきた右側のアサシンを振り抜く勢いのまま武器ごと真一文字に切り裂く。その剣風に周りの砂煙が吹き飛ぶ。

切り裂かれた仲間にもくれず残ったアサシンが一齐に師匠に殺到する。

完全な死に体。絶妙なタイミング。右に流れた刃を戻す時間も無くその身を四本の短刀が貫く。わけも無い。

二刀目。突如腕力だけで強引に戻ってきた大剣が迫りくる短刀全てをあらゆる方向に弾く。

口元しか見えないがアサシンの顔にはありありと驚愕の表情が、師匠の顔には凶暴な笑みが浮かぶ。

三刀目。驚愕が張り付いた首の一つが宙を舞う。血煙が舞い上がり黒装束を赤に、赤髪を深紅に染め上げる。

口元に付いた返り血を舌を伸ばして舐め取り、笑みを更に深く、動きは更に速くなる。

瞬きの間も無く、師匠は残った三人の足下に飛び込んでいく。

四刀目。しゃがんだまま逆袈裟に振り上げられた大剣はアサシン二人の胸をまとめて両断する。

最後の一人の動きに僅かな逡巡が生まれる。攻めるにしても退くにしても致命的な停滞だ。

五刀目　　は無い。何の躊躇いも無く振り切った剣を手放し、未だ動き出せない残りの一人の眼窩に黒い布ごと指を滑り込ませる。神経を引き千切るようにして指が引き抜かれると痛みのみあまり絶叫しながらアサシンのた打ち回る。その首元をブーツで抑えると一気に踏み抜いて頸骨が破壊される。

「んよし。一丁上がりだな」

「……………僕、あの人怖いです」

手に付いた血を比較的汚れていないアサシンの服で拭っている師匠を見ながら隣でドーラが怯えたように呟く。

……………そこは全面的に肯定せざるを得ないのが弟子としては非常に悲しい。

それにしても、だ。

私の中で新たな疑問が芽生える。

「本気でこちらを狙ってくるには戦力が少なすぎるな……………」

前回の大規模な襲撃が失敗したのなら今回の襲撃の敵戦力がそれ以下なわけは無い。

そうでないとするれば何か他に目的があるのか。例えば陽動……………？

そこまで考えて血液が沸騰するような感覚が全身を襲う。

まさか、アレクたちが狙われているのか？

思考よりも早く体が反応する。席から跳ねるようにして立ち上がると、出口に向かつて走り出す。

私の探知能力では町の外れまでは探れない。ならば急いでそう考えた所で腕を掴まれて我に返る。

手を掴んでいるのはドーラだ。

「落ち着いてください、白銀さん！ あの子たちは無事です」

「ま、陽動では無かったみたいだな。その代わりとびきり上等なのがこっちに来たみたいだ」

振り返った視線の先にいたドーラの顔は緊張が、師匠の顔には獐猛な獣の笑顔が浮かんでいた。

視線を出口に戻すとそこには三つの影が地から這い出るように人型を形成していた。

第十一話 続・史上最強の師匠（後書き）

本格的に魔法が出てきたのできつちりと説明を…。

今作の魔法という概念は主に二種類に分けられます。

前もった用意と長い時間を掛かる『儀式魔法』と戦闘などの際に使われるスピードを念頭に置いた『即興魔法』です。

きつちりと時間を掛けて呪言を唱えることで体への負担は減り、魔法は安定性を増します。

作中で師匠さまが使っていた時空間魔法は本来、数人の導師クラス
の魔法使いが数人掛かり、数日掛かりでやる物だったりします。

魔法を使うために欠かせないのが集束陣です。

人の身体に流れる魔力を集束、凝縮する、という代物です。

展開には呪言を高密度に圧縮した圧縮言語を使うか（師匠の使ったアレも一応は圧縮はしてあります。言うならば半圧縮といったところでしょうか）、魔力のこもった武器などで絵を描くようにして展開するか、となっています。

レベルとしては、魔法陣 破戒陣 殲滅陣、となっています。

それ以上もあるにはありますが、完全にジハード（聖戦）級の魔法であり今、使える者はほとんどいません。

と、ある程度のネタばれを覚悟で説明してみました。

本来は作中に散りばめられなければいけないんですが…。

分からないことがあれば聞いて頂ければお答えします（ネタばれし過ぎない内容ならばですが）。

感想、評価、コメント、頂けると嬉しいです。

第十二話 襲撃 前

這い出した影が晴れるとそこには三つの人影が存在していた。その存在感に空間が軋み揺らめき、烈風が辺りを舐めまわす。

「新手か？ しかも…」

「ええ、かなりの使い手ですね」

隣に並ぶように歩いて来たドーラが言葉を続ける。

「この感じ……人ではなさそうですね」

「まああれほど大層な登場の仕方だからな。あんなことが出来る同族はごめんだ」

「冗談めかして言うてから鼻をならすと隣でドーラが笑う。

「ちなみに空間を形成して移動に使用するのはかなり難しいのです。あの人たちが手練れなのは確定ですね」

ドーラが指先で虚空に円を描き、初めて会った時のように空間を歪めて裂いてみせる。

ちなみにドーラの腕はサイズは変わらないものの、人間のそれでは無く、龍のそれになっている。

「へえ、なかなか骨がありそうなのが来たじゃないか。しかもちよつと三匹か。一匹もくらい」

私の隣に来た師匠が放り投げた剣を拾い、肩に担ぎあげて高らかに宣言している。というか剣が巨大なので私に当たりそうで気が気

でない。

「なるほどねえ。こいつらはアレがここに来るまでの足止め役つてことか。別に逃げやしないってのにね」

師匠は足下に転がっているアサシンの死体を蹴りつけながら口の端を吊り上げる。

「何というか、非常に不謹慎な行動なのだが、それを咎めることは出来ない。単純に怖いからだ。」

「君たちが僕らの敵かな？ …えーと、確か、白銀の二つ名を持つ^{ブラチナ}てる傭兵だったよね、ミアア？」

人影の一つ、露出度が高い割にやたらと袖が長い服を着た黒髪の男が首を傾げながら隣の仲間に聞いている。優男然とした雰囲気醸し出しているが、一挙手一投足に一切隙は見いだせない。

ちなみに白銀などと大層な名前を付けたのも広めたのもアレクだ。正直いい迷惑なのだが、過去に一度、文句を口にしたら泣かれそうになったので、以降、黙認、というか無視を決め込むことにしている。

「ふふ、エラン。私だって詳しい情報は持っていないのよ？ けどあの雰囲気…、どうやらあの坊やがターゲットのようね」

ミアアと呼ばれた黒いローブを着こんだ女が答えを返しながら、これ見よがしに舌なめずりをする。その姿はさながら蛇のようであり、正直ぞっとしない。

「そんなものどっちでも構わないだろ。姿を見られたからには全員消すんだからな」

他の二人より頭一つ二つ上背がある禿頭の男が目を細めて私を睨みつける。全身に巻かれている鎖の装飾を音を鳴らしながら弄り回している。

「それにしても、俺達も馬鹿にされたものだ。たかだか人間二匹と半龍一匹に全員が呼び出されるとはな。しかも女が混ざってるじゃねーか」

卑しく嘲笑いながら私の隣にいる師匠に視線をぶつける。その視線にはあからさまな侮蔑の意が込められている。

その視線を受けた師匠は不意に俯き、顔を長い髪で隠してしまう。

……ピンチだ。冷汗が止まらない。震えも止まらない。今すぐここから逃げ出したい。

これは敵に気圧されたとか、怯えているとか、そういった理由からではない。

理由はもう少し身近なところにあつたりする。

数秒後、どこらからともなく背筋を舐められるような錯覚を伴う笑い声がし、眩暈を催す程の殺気が辺りを蹂躪する。

「……………ヒヤ、ヒヤハハハッ！！ アイツ、オレにガンつけやがったよ！ いい度胸だ！ オレはあいつを貰っぜー！」

間。

「……………オレですか？ え、えーとこれは一体…？」

皮膚を差す激烈な殺気に感づき、頬をひくつかせながら私の方を向き…即座に視線を前に戻す。おそらく私の方を向こうとして師匠が目に入ってしまったのだろう。

龍すら恐れて視線を外してしまうのだから、どれほど異常な気配をまとっているか、今更説明は不要であろう。

「……………まあ、アレだ。二重人格みたいなものだ」

…解説がやや投げやりなのは致し方あるまい。

私とてそれほど詳しく知らないのだ。

「前は宿屋の主人に馬鹿にされた時にあの人格が出てきて……………町が半壊したな」

「……………何と言えはいいか」

私の解説にさらに頬をひきつらせ、やはり前を向いたまま固まっている。

それなりに長い間、師匠と付き合っている私ですら横を見たくない。というが見れない。

この状態の師匠を見るのはこれで三回目になるだろうか。

魔法を使う者は大抵、自らにリミッター限界点というものを設けている。当然、私やアレク、もはや人外と言っても過言ではない師匠ですら例外ではない。

前にも話したが、魔力は生命力を還元しているのだから、自らの魔力限度を超えて魔法を使うことは、即ち生命を削ることと同意であるからだ。

仮にコレが外れると、身体に多大な負担を掛ける代わりに通常時よりも遙かに高い魔力が生成でき、戦闘能力は飛躍的に向上するのだ。

今の師匠はそのリミッターを手加減しているものの、半分ほど外している状態にある。

全開に外したところを過去に見たことがあるが、その時の非常識なほどの強さがこそが、師匠が『世界最強』と呼ばれる所以なのだ。

「……………コレ、いらねーな。やるよ」

師匠は数歩前に出てそう言うと、手に持っていた赤剣を私に放り投げる。

が、抜き身の大剣、しかも投げつけてきた人物が人物である。当然、受け止めることなど出来ず、身を擦よって迫り来る大剣をかわす。風圧で服が裂け、脇腹から血が噴き出す。大剣は後ろでカウンタ―を両断し突き刺さり、ようやく止まる。

「……………危ないで」

「何か言ったか？」

「……………何でもないです。はい、何でもないです」

途中まで出かかった言葉を命欲しさに飲み込み、目を逸らす。

臆病者ヘタレということなかれ。絶対的な恐怖には人間誰しも頭を垂れるしかないのだ。

「…お前、何者だ？ 本当に……………人間か？」

大男が師匠から発せられる異常とも言える殺気と魔力に気づき目を見開いてこちらに問いかけてくる。その隣の二人も同様にあまりの気当たりに動けないでいる。

「……知るか。むしろ私が聞きたいと」

「何か言ったか？」

「………何でもありません。はい、何でもありません」

出かかった言葉を再び飲み込み、またも目を逸らす。

その私の様子に不機嫌そうにブツブツと何か呟いていた師匠だが、不意にニヤリと笑みを浮かべる。

その笑みは大男の卑しい笑みとは質が違う。魔物であるはずの大男よりも禍々しく、狂々しく、血が滴るように凶暴な笑みだ。

並の人間では向けられるだけで心臓が止まるのではないだろうか？

「ま、こういう時は八つ当たりでもしてイライラを解消するもんだ」

そう言って四足獣のように身体を丸め、息を吐き出す。

「………マズイっ！ 逃げるんだジエネ！！」

一見、意図が分からないその行動に、いち早く反応したのはエラと呼ばれた魔物の男であった。

それとほぼ同時、空気が爆ぜ割れる音を残して師匠の姿が掻き消える。

「………な」

「おっせえよ」

その声とともに、ジエネと呼ばれた大男の前に師匠の姿が現れる。

そしてジエネの額に、銃を模して折り曲げられた右手を宛がう。
まるで押し当てられた人差し指に見えない鎖でもあるようにジエネは身動き一つ取れずにいる。というか師匠以外、私も含め全員、少しも動けてなどいない。それほど桁違いに動きが速いのだ。
おそらく過剰魔力を身体能力の向上に多く使っているのだろう。

「ドラゴンの餓鬼！ 全員をもつと広い所に飛ばせ！ 大至急だ！」

「うえ！？ あっ、はい、わかりました！」

出来る出来ないを聞かずに、師匠がドーラに命令する。

この狭くはないが、広いとも言い難い酒場で戦闘をするのは不利と踏んだのだろう。

「いや、自らの故郷であるこの町が戦闘で破壊されるのを危惧したのか。」

「邪魔になったら普通の奴も殺しちゃおうしな！」

………違った。

私当场違いな片頭痛に額を押さえていると、視界に入る木の床が短い草が生えている地面に変わる。

顔を上げ、視界に映ったのは壊れたテーブルでも割れた酒瓶でもなかった。目の前に広がるのはどこまでも広がる草原、ただそれだけだ。

「何分即興なので…… エーデル平原まで飛ばすのが限界でした」

…… エーデル平原 確かセレーヌのすぐ近くにある草原だったはずだ。

やはりというか、今更というか……、私たちを全員まとめて移動させるとは、さすがロキ級との混血といったところか。

「……ハ、お詠え向きの場所じゃねーか！ じゃあ、オメエはこっちだ！」

一通り周りを眺めた後、満足したように呟き、師匠は右手でジエネの額を小突く。

たったそれだけの行為で、見上げるほど上背のあるジエネが吹き飛ぶ。

「そっちの二体はオメエらが殺れよ。一体は持ってやるんだからな」

そう言うと師匠は狂ったように嗤いながら悠然とジエネが吹き飛んだ方向に歩いていってしまう。

「……僕、白銀さんを見て思ったんです」

固まったまま動けずにいる、エラン、ミアアの隣を構えもせず歩く師匠の背を見て、ドーラがうわ言のように呟く。

「あなたの周りには普通の女性は集まらないんですね」

……………余計な御世話だ。

第十二話 襲撃 前（後書き）

何度か書きなおしたため、かなり投稿が遅くなりました…。
次回は戦闘ですので割と早い…筈です。

第十三話 襲撃 中

「あ…、あれが紅凜^{こうりん}」

「噂は聞いてたけど…」

蛇に睨まれた蛙。強烈な殺気と魔力に当てられた魔物二人は、そんな体でようよう動き出した。

どうやらあの二人は師匠のことを噂のみとはいえ知っているらしい。

それにしても、だ。

「紅凜、か。相変わらず色々なところで渾名が増えているな」

「あの人だったんですか…、支配者級二人を相手に大立ち回りを演じたというのは」

「……何をやってるんだ、あの方は」

また一つ、新たに加わっていた伝説に頭痛を感じないでもないが意識的にそれを無視する。

あの人とロキ級がぶつかれば街一つくらいは簡単に消し飛ぶ。私どころかアレクすらもそういった情報を得られなかったのは、その戦闘を見て生きていた人間が極端に少なかったのだろう。

…まあ何にせよ相手が師匠に畏縮してくれているのは好都合だ。

「お前たちの相手を長々する時間はない。早々に斬らせてもらおうぞ」
「その意見には同意です。私も国王の身が心配ですので」

着替えをした為、腰に付け替えていた剣を抜き一步踏み出して相手を挑発する。それに同調するようにドローも龍のカギ爪となって

いる十指を眼前に合わせ、一步前へと出る。

相手の手の内を知らないのだから不用意に飛び込むような真似はしたくないのだが何しろ時間が無い。

アレクがいれば余程のことがない限り問題は無いと思うのだが……。

「舐めるなよ……ッ！」

私たちの挑発に優男風に見えたエランの相貌が激変する。

整えられた髪は見えざる魔力にさわめき、垂れ目に見えた両の目はつり上がり、口の端は耳まで裂けている。

いわゆる魔獣のソレだ。

「一気に魔物臭くなったな。お前もあんな風になるのか？」

「ははは……勘弁してくださいよ、デユオさん」

横目でちらりとドーラを見ると微苦笑している。

隣にいる半龍が本当に人間臭いと再認識して私も苦笑を返す。

「バックアップを頼む」

「了解です」

ドーラが返事をしたのを確認し、下生えの草の上を一步二歩と踏み出して一気に加速する。

先手必勝。私がどうにも苦手とした師匠の教えを実践する。

その師匠は大分遠いところで大男と対峙している。その顔には邪気の無い笑みが浮かんでいる。

我が師匠ながら、子供のようなその笑顔に恐怖を覚える。

気を取り直して眼前の敵に集中する。

一刀で首を落とす。

そんな思惑通りに吸い込まれるようにして下方に構えていた剣を首に向け斬り上げる。

勢いに乗った刃は

何ら抵抗もなくエランの首を切り落とした。

……なっ！

「驚愕の呻き声を上げたのは他でもない、私だ。」

何の策もない、真っ直ぐで速さだけの一刀で、仮にも身震いするほどの魔力を有している魔物の首を落とせるはずがない。

それにエランの隣にいるミアアが微動だにしなかった。ただ、微笑していただけだ。

言い知れぬ不安を感じる私ときりきりと空を舞うエランの首の目が合う。

嗤っている

不安が悪寒に変わり、踏み込んだ足を基点に退こうとする。

「ダメよ」

ミアアの放った短い一言に、その場に釘付けにされる。私の両足首はいびつな泥の腕に掴まれていた。

召喚術が変則的な地脈魔法か。

推測する間もなく目の前のエランの首無し死体が膨張し爆発した。爆発の勢いに乗ればただの肉片でも驚異。骨など飛んでくれば人

間一人くらい軽く死ねる。

舌打ちをして剣を盾にしようと動いた私だが、辺りに飛び散ったのは肉片でも骨ではなく十数本の黒い触手。

「なッ!？」

驚愕をなんとか飲み込み、瞬間的に盾がわりにしていた剣を振るうが如何せん出足も遅ければ間合いも近すぎる。

数本の触手が剣の間合いをすり抜けてくるのを見てせめて急所に当たらぬように身をよじる。
が、

「剣から手を離してください」

と落ち着いた声音と共に目の前に大質量が落下。私の持つ剣ごと迫っていた触手を地面に叩きつける。

その大質量　　ドーラの巨大化した腕から地面に赤い法陣が展開。炎が地面から立ち上がり、一瞬で壁を作り、触手を燃やし、ミアを飛び退かせる。

「なるほど。これは『影』ですね」

ドーラは潰された上に焼きつくされた黒い触手を見て一人呟く。
腕は人のサイズに戻っている。

「影、か。あまり聞かない能力だな」

「ええ、私たちの中でも稀有な能力ですから。『影喰らい』などと呼ばれていて文字通り影を喰らって戦闘に使います」

そう言うと、ドーラは下敷きとなっていた剣を拾い上げて少しだけ驚いた顔をする。

「完全に壊れたと思っただんですが。随分と頑丈に出来ているのですね」

「……ん？ ああ、それを作った奴が言うには『壊れない剣』がコンセプトらしい」

頭の中で笑顔でそれを差し出してきたマッドサイエンティストを思い出しながら頬を歪める。

…しかし、壊れない剣といっても限界がある。一応は剣としての形を保っているがガタも相当来ている。

…無理は出来ない、ということか。

そして、間の悪いことに通常の拳銃よりも少々大きく、かさ張るヒドゥンはアレク達のところに置いてきている。

それに比べ、比較的持ち運びが容易な似非護身武器 ライトニング・レイはズボンの後ろポケットに差し込んであるが、如何せんあれらと対峙するには火力が足りない上に残りは三本しかない。

ため息を吐いて視線を戻すと、空に浮かんだ雲の影からちょうど這い出てくる無傷のエランの姿が映った。

「で、アレの弱点はわかるのか？」

「んー……、残念ですがわかりません。辺り一帯を燃やしつくせばさすがに倒せると思いますか？」

「師匠に標的にされるのが怖くないんだったら是非頼みたいところだな」

「冗談めかして言うドローに私は割と本気でそんなことを呟く。

あの状態の師匠にかすり傷一つでも付けようものならば、顔見知

りといえども漏れなく殲滅対象入りだ。それだけは絶対に避けなければいけない。

「あはは、本当に爆弾みたいな人なんですね。あの人は」

「そんなもので済むなら私もそれほど悩まないでいいんだが」

ため息を吐く私を見てドーラは笑みを浮かべていたが、正面を向いた時にはその表情が真面目なものに変わる。

「まあ、冗談は置いておきましょう。今はあの二人を退けることに集中です」

「それは無理だよ。剣でも爪でも、僕は殺せない」

炎が揺らめいて絶ち消える。

下生えの草が燃え、煙が上がるなか、余裕を取り戻したのか泰然とした態度でエランが語りかけてくる。

「それに大したことないじゃないか。確かに動きは速いし力も強いけど、所詮は人間に毛の生えた程度だ。わざわざ僕らが三人も呼び出されたのはあの怪物と半龍がいたからかな？」

挑発した仕返しといったところだろうか。

「まったくもってその通りだな」

とはいえ、言っていることは的を得ている。

この場で純粹な人間は私一人だ。…や、正確に言えばもう一人いるのだが、その人をただの人間と称するには何か違和感がある。

世界最強に半龍に強烈な魔力を有するシレン級かロキ級の魔物が
三体。

あー…浮いているな。

「ふふ…ははは！ やっぱり面白いですね、貴方は。僕の見込んだ通りの人ですよ」

今回の件の当事者である私が呆と遠い目をしているのを見て、ドーラが堪えきれないといった様子で笑いだす。

「その物事を正確に捉えられる冷静さがあなたの強みなんでしょうね。……それに」

「頻りひんり笑ったあとにドーラは目を細めて小声で私に呟きかけてくる。

「まだ見せていない力があるんですよ？」

「……買い被りだな」

適当にあしらう私の言葉を気にした風もなく、そうですか、と前を向く姿はやはり人間のソレだ。

「あらあら、やっぱり貴方たち危機感が足りないんじゃない？」

しばらく俯いて黙ったままであったミアが顔を上げる。

ローブのフードは落ち、口元はエラン同様に裂けて目元は黒いクマが浮かんでいる顔が見える。

先程までとは顔つきが違う。ということとは。

「本気、ということですね。大きいのが来ますよ」

「この魔磁場の変化は……瞬雷系か」

瞬雷系 炎刹系と並ぶ、いわゆる魔法の四大素の一つである『雷』を使役する魔法が比較的小さいの法陣から幾つもの小さい光球となつてこちらに向かつてくる。

おそらく私たちが話している間に魔力を貯め込んでいたのだろう、法陣は小さいが数、速さも通常の魔法とは倍近い。

一見すれば師匠の蛇のような雷よりも規模が小さいため、威力も大したことがなさそうに見えるが、一つでも当たれば一瞬とはいえず身体を自由を奪う位の威力はある。言うまでもなく、そうならば終わりだ。

持っているだけでガタが来ているとわかる剣を地面に刺すと、バツクステップで光球から距離をとる。

「自分から武器を手放すとはね。無様だよ」
「言つてろっ！」

楽しくてしようがないといった声色のエランに先程よりも苛立ちを覚えるがとりあえずは相手にしない。

向かつてくる光球は私に七、ドーラに十。

オートサーチなのかミアは次の詠唱に入っている。今度は先のものより巨大な魔方陣 破戒陣が展開されている。

そこまで確認したところで地面に這うようにして伏せる。

頭上に数個の光球が通りすぎるが、当然時間差がつけられている攻撃を全て避けることなど出来ず、視界の端には下方に動きを修正され再び私に向かつてくる光球が移る。

横に転がるようにしてそれを交わして、伏せたときに握り込んでいた小さな石を光球に向けて投擲する。

魔法というものは存外に物理的な攻撃に弱い。特に無理に形状を

留めようとしている魔法は少しの衝撃でも破裂してしまう。

本来、決まった形状を持たない魔法を（今回の場合は雷を）扱いやすい形に固定するためには、魔力と別に『意思の力』が必要とされる。魔法が存外に物理的な攻撃に弱い、というのはその意思の力が衝撃に酷く脆いためだ。

しかも今回のようにオートで動くタイプの物は手から離ればそれっきりだ。術者との繋がりを持たない魔法はさらに脆くなる。

私の予想通り光球は石ともに破裂する。

が、練り上げられた魔力の量はそこらの魔法使いとは比べ物にならない。

破裂時の想定外の風圧に、体勢の悪かった私は為す術もなく吹き飛ばされる。しかも近くに飛んでいた光球の一つも誘爆しさらに風圧が増す。

ようやく風圧が治まり、尻餅をついたような格好から立ち上がるうとするがそれよりも速く光球が二つこちらに向かってくる。

考えるよりも先に浮かせていた腰からライトニング・レイを二本抜いてそれに投げつける。

高い音を立てて光球が相殺される。

魔力同士の激突なので先程のような激しい爆発は起きないのは幸いだ。

残る光球は三つ。

肺に貯まった息を吐き出して跳ねるように飛び起き、その勢いそのまま詠唱中のミーアの元に走り出す。

後手に回り続けなければいずれば直撃を貰ってしまう。何より、そう易々と詠唱など続けさせる訳にはいかない。

身を屈めながら距離を詰めようとするが、当然、エランがそれを許さない。

トン、と軽く地面を手で叩くとエランの影から人型大の『何か』が這い出してくる。

「アレを喰い殺せ」

エランが私を指差し、指示を飛ばすとその『何か』が分裂し、人間の口だけを取り出したような醜悪な形に変貌、こちらに跳ねるようにして近づいてくる。

一体目を取り外した鞘で地面へと叩きつけ、二体目を返す刀で上空へとかち上げる。

が、上へと打ち上げようとした魔物が鞘に噛みついたため吹き飛ばすことが出来ずに少しだけたたたらを踏む。

その間隙を縫うようにして魔物の一体が牙を剥き出しにして飛び込んでくるのを交わすことが出来ずに鞘を持っていない左腕を差し出す。

「……………っ！」

鈍い痛みで舌打ちをし、鞘の根元で魔物を強打して食い込んだ牙を抜かせる。

そしてそのままその鞘を後ろへと投げつける。狙いは言うまでもなく後ろから迫り来る光球だ。

狙いに違わず鞘が光球を捉えたのだろう。一度目のような爆風が背中を押し、その勢いそのまま魔物を無視して一気に前進する。

「中々に機転が利く。……………けど」

感心しているのか馬鹿にしているのか、笑みを漏らすエランがこちらに掌を向ける。

「残念。振り出しだ」

そう言ったエランの周りに薄緑の法陣が展開、光球が爆発した時よりも遥かに強い風が起き、最初に剣を突き刺した所まで吹き飛ばされた。

失敗した。『影喰らい』なる種族は魔法が使えないと決め込んでいた。

自らの失態にぶつけどころのない苛立ちを覚えるが、目の前に最後の光球を現れたことでその思考を一時中断する。

最後の一本となったライトニング・レイを投げ、呆気なく最後の光球は姿を消した。

……妙だ。

目の前の脅威は一応とはいえ去ったのだが、私の心を占拠しているのはそんな感覚だった。

確かに厄介な攻撃ではあったものの、この程度なのだろうか？

魔方阵で事足りるオートの雷球。

足止めのためとはいえ、それほど強力ではない小型の魔物。

その気になれば私にダメージを与えられたはずなのに吹き飛ばすだけに留めた風雑かざなぎの魔法。

かなりの力を有すると思われる魔物の攻撃にしてはいささか規模が小さすぎる。

つまるところ手加減をされているということになるのだが

「あら。気が付いちゃったのね」

黒い破戒陣の中でまるで歌でも唄い続けるように詠唱を続けているミアが笑みを浮かべてこちらを向く。

その頭上には漆黒の球体。

大きさは先の光球と変わらないが、プレッシャーは段違いだ。

「けどねえ……。貴方たち、舐めすぎよ。もっと本気でかかってくればこの魔法も止められたのに。残念ね」

そう言っつてミアは指を連続して鳴らし始めた。

「何を……っ!?!」

異変を感じたのはミアが指を鳴らし始めて三回目の時だ。

身体が……。重い？

「重力が……。!」

「!」名答

五回目の音。

立っつていられず膝をつく。

重力の支配下から逃れようにも、こうなつてはすでに手遅れだ。

「デュオさん!」

「駄目だよ、今いいところなんだからね」

ドーラの焦燥に駆られた声が聞こえたが、エランの愉快げな声と重い音が響くと声どころか魔力すら感じられなくなってしまった。

「あの半龍相手じゃ五分と保たない魔法だけどそれで十分」

「自由に動けない貴方をくびり殺すだけならお釣りがくるわ」

六回目の音。

地面に盛大に身体を打ち付ける。身体中の骨や筋肉が悲鳴をあげ、鈍い痛みが全身に広がる。

最後に視界に写ったのは嬉しそうに魔物の顔を歪ませる二人の姿であった。

「それじゃあ」

「ご機嫌よう」

七回目の、指を鳴らす音が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2233c/>

白銀傭兵と遠い昔の約束

2010年10月9日23時08分発行